

研究紀要

第 15 号

目次

序

<共同研究報告>

落合 美怜・小久保 拓也・吉田 仁香
是川縄文館共同研究について

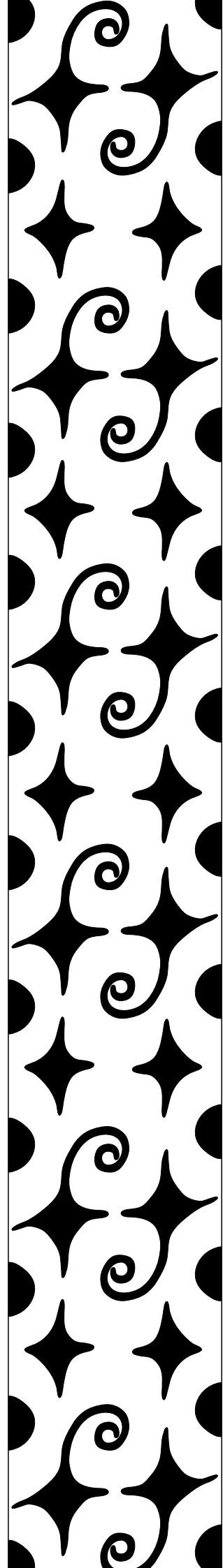
<論文・資料紹介>

算用子 眞充・上條 信彦
是川一王寺遺跡における骨角器の製作と利用
—泉山コレクションの骨角器を中心に— 1

澁谷 侑奈
一王寺遺跡の貝類と貝製品 33

令和 8年 3月

八戸市埋蔵文化財センター
是川縄文館



序

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館では、「縄文文化の素晴らしさを発信する」という使命のもと、八戸市内の埋蔵文化財調査をはじめ、埋蔵文化財の保存と活用にもとづいた展示・体験学習などの事業を積極的に実施しております。

令和7年度より、金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究所との第5期共同研究が始まりました。中居遺跡から出土した漆塗り櫛や藍胎漆器の分析によって、漆製品の素材や製作技法の解明することが目的です。

今号では2編の論考を収録しました。

1編目は泉山コレクションの一王寺遺跡出土骨角器を中心として、骨角器の製作と利用について研究しています。

2編目では、一王寺遺跡の貝層より出土した貝類の組成と貝製品からは川縄文人の貝利用について研究しています。

当館から発信された研究成果が、考古学研究、そして埋蔵文化財の保護・活用に少しでも貢献することができれば望外の喜びであり、当館では今後も積極的な研究活動に努めて参ります。

末筆ではございますが、当館の事業に対し、平素よりご理解、ご支援を賜っております、関係各位のみなさまに厚く感謝を申し上げます。

令和8年3月

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

目次

<共同研究報告>

落合 美怜・小久保 拓也・吉田 仁香
是川縄文館共同研究について

<論文・資料紹介>

算用子 眞充・上條 信彦

是川一王寺遺跡における骨角器の製作と利用

—泉山コレクションの骨角器を中心に— 1

澁谷 侑奈

一王寺遺跡の貝類と貝製品 33

是川縄文館共同研究について

Collaborative research at the Korekawa Archaeological Institution

落合 美怜・小久保 拓也・吉田 仁香
OCHIAI Misato, KOKUBO Takuya, YOSHIDA Niko

1. 共同研究の目的と経緯

是川縄文館では、調査研究を主たる事業として掲げ、大学等の研究機関との共同研究事業を推進している。本事業により蓄積された質の高い研究成果を、館事業で公開活用することを目的としている。第1・2期共同研究では、縄文時代における環境変動とそれに対する人の関わりについて研究を推進した。その成果から、環境変動に適応した縄文人の文化形成のプロセスや変遷の解明が課題として認識され、第3期では、火山ガラスからみた八戸地域における土器の変遷と地域間交流の解明についての共同研究を行った。第4期では、中居遺跡出土^{なかい}籃胎漆器^{らんたい}や編組製品の編組技法からみた縄文時代の技術知の解明についての共同研究を行い、その成果から、道具毎に素材を選定し、最適期に素材の採取を行うなど、集落生態系の形成と合わせ、是川遺跡の高度な植物利用が明らかになった。

第5期では、さらなる植物資源利用の解明のため、漆塗櫛の構造解析や漆塗膜の成分分析を進めることとし、金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究所と協議を行い、令和7年度から共同研究を推進している。

2. 第5期共同研究テーマ『縄文時代の櫛と漆混和剤の研究』

中居遺跡の漆塗櫛や籃胎漆器、繊維・編組製品の分析による、素材・製作技法、漆工技術の解明。

3. 研究計画

- 籃胎漆器，繊維・編組製品の樹脂包埋切片法およびデジタルマイクロスコープ観察による素材同定
- 漆塗櫛のX線CT撮影及び構造解析による製作技法の解明
- 漆塗膜の成分分析および漆混和剤の解明
- 結歯式櫛の復元製作による技術知の解明

4. 期間

2025(令和7)年4月～2028(令和10)年3月(令和7年～令和9年度の3ヵ年計画の1年目)

5. 研究体制

- 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 館長 中村行宏(以下、職員)
- 金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究所 特任准教授 佐々木由香
- 明治大学大学院 蒲生侑佳

6. 概要

初年度にあたる本年度は、共同研究の方向性や対象資料、調査計画についての協議を行い、中居遺跡の漆塗櫛、籃胎漆器の観察・計測、漆塗膜や編組素材分析のためのサンプリングを行った。また、出土遺物の分析に向けた基礎研究として、現生植物のタンパク質分析や漆の塗布実験を実施した。

最終年度に、共同研究の成果を企画展示において公開し、研究の総括論文を当誌に掲載する。

是川一王寺遺跡における骨角器の製作と利用 — 泉山コレクションの骨角器を中心に —

The Production and Use of Bone Artifacts at the Korekawa Ichioji Site:
Focusing on Bone Tools in the Izumiyama Collection”

算用子 眞充・上條 信彦

SANYOSHI Masamitsu, KAMIJO Nobuhiko

はじめに

現在、円筒下層式期のまとまった骨角器出土遺跡としては、館崎遺跡（（公財）北海道埋蔵文化財センター 2016）・サイベ沢遺跡（市立函館博物館 1958）^{たてさき}・三内丸山遺跡（青森県教育委員会 2018a・b）^{さんないまるやま}・東道ノ上（3）遺跡（青森県教育委員会 2006）^{ひがしみちのかみ}・二ツ森貝塚（七戸町教育委員会 2007）^{ふたもり}が挙げられる。また、三陸沿岸では、大木式文化圏に属する崎山貝塚がある（宮古市教育委員会 2009）^{さきやま}。本稿の対象となる是川一王寺遺跡では、泉山兄弟により多数の骨角器が回収されているほか、平成以降の史跡整備に伴う八戸市教育委員会（以下、八戸市教委）による調査でも出土している（八戸市教委 2018）。特に、銚頭状骨角器は遺跡の名前を冠した「一王寺型」として命名されており、大型魚類の刺突漁法の拡散を探るうえで基準資料とされている（渡辺 1973）。しかし、泉山コレクション中の骨角器のほとんどは図化されておらず、一部の資料のみが報告・紹介されているにすぎない（八戸市博物館 1988・八戸市教委 2018 など）。そのような状況の中で、筆者らは八戸市是川縄文館の協力を得て、泉山コレクションの骨角器を整理する機会を得た。本稿では、既報告資料とあわせて是川一王寺遺跡出土骨角器を集成し、器種組成・形態的特徴・製作技術の特性などの基礎的な分析を通じて、遺跡における骨角器製作と利用の実態を周辺遺跡と比較しながら考察するものである。

1. 泉山コレクション骨角器の概要と分析方法

(1) 資料の概要

主な対象資料である泉山コレクションの骨角器は、1929（昭和 4）年に大山史前学研究所の宮坂光次・池上啓介による発掘調査（B 地点）の調査後（宮坂 1930）、同年にその近くで、泉山岩次郎・斐次郎兄弟によって調査されたものである。現在、本遺跡出土の骨角器は、八戸市教委発掘資料・泉山コレクション・史前学研究所発掘資料・長谷部言人の論考・東大所蔵の 5 ヶ所から、計 166 点が確認されている。

八戸市教委発掘資料は前期中葉～後葉 24 点と、中期後葉 15 点を合わせた合計 39 点である（八戸市教委 2018）。本稿の対象となる泉山コレクションの骨角器は 99 点である。また、宮坂光次の発掘資料として 26 点の骨角器が確認されており、史前学研究所発掘資料は、宮坂光次の報告（宮坂 1930）に掲載された図を転載する。なお、図中の各遺物についてスケールの記載がないが、写真や実測図は原寸大であると推定した。また、宮坂による発掘資料のうち、1930（昭和 5）年の報告では未掲載であった針状骨角器 1 点が後に大給尹の論考で報告されている。東大所蔵には 1 点の銚頭状骨角器があり、高橋健によって報告されている（高橋 2008）。なお、泉山コレクション中には晩期に帰属する、あるいは骨角器と認定できない資料が計 3 点（図 16）あるため、それらを除外した 145 点を分析対象とする。

(2) 整理・図化の方法

今後の資料利用の便を考慮し、八戸市教委の管理 ID・整理番号を、そのまま資料番号として用いる。資料は 2023（令和 5）年 10 月に弘前大学が八戸市教委から借用、写真撮影・図化した。また八戸市博物館の展示中の資料は 2024（令和 6）年 1 月に館内で写真撮影・図化した（註 1）。原図は Adobe 社 Illustrator でトレースした。版の縮尺は 3 分の 2 で統一した。器種名については青谷上寺地遺跡^{あおやかみじち}の報告に従った（鳥取県埋蔵文化財センター 2010）。以上の作業は算用子が行った。

2. 資料の観察結果

(1) 釣針形骨角器（図 1-1～6）

6 点を図示した。全てが鹿角製とみられる。図 1-1 は唯一の完形品で、単式無鏃で、チモトは糸を繋ぐために加工される。図 1-2 は軸部を欠く。内鏃である。図 1-3～6 の 4 点は、針部を欠く。図 1-3・4 はチモト部の作出が同じで、1 条の溝が一周する。図 1-5 は針部を欠くため、釣針かどうか判断に迷う。上部の加工が図 1-6 と類似するため、釣針と判断した。針部を欠ため、鏃の有無は判断できない。

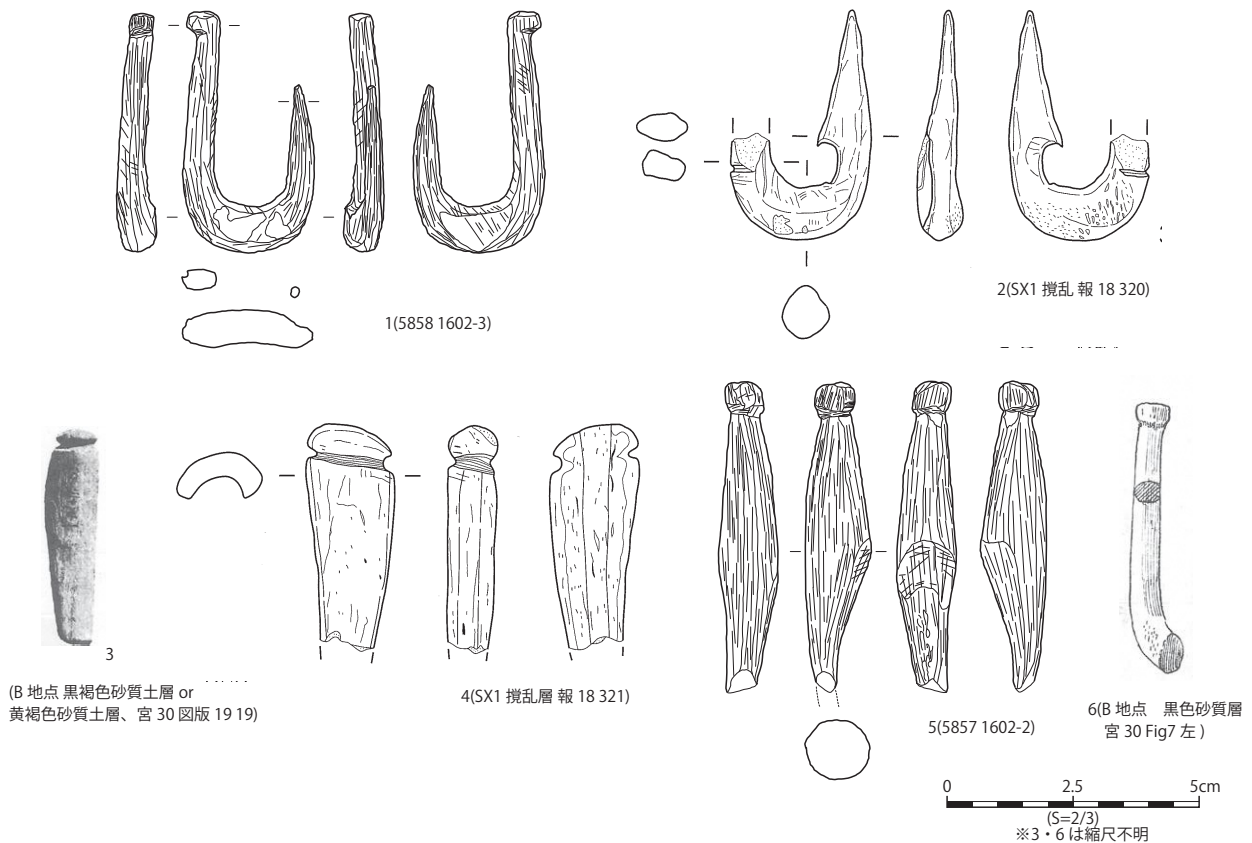


図 1 是川一王寺遺跡出土釣針形骨角器

(2) 鋸頭状骨角器（図 2-1～21）

21 点を図示した。図 2-1 は、器体が挟りなどで分割されておらず、尾部が二股に分かれる。図 2-2～17 は、頭部が二等辺三角形に作られており、頭部と胴部の区別が認められる。そのうち、図 2-2～4 は尾部が分かれておらず、いずれもソケットは湾曲した断面形を呈す。これらには、短いものから長いものまでさまざまな資料が含まれる。図 2-5～17 は尾部が二股に分かれる資料である。さらに、5～10 のように頭部と体部の区別が頭部の張り出しのみで示される場合と、図 2-11～16 のように背

面にも段差が及ぶ場合に分かれる。ただし、図 2-11 のように尾部の形態が明らかに異なる資料も存在する。また、図 2-15 は頭部に段のような構造が観察される。図 2-18 ~ 21 は頭部のみが残存する破損品であり、尾部の形状は不明である。いずれの資料も、鹿角あるいは陸棲哺乳類の骨を使用したものと考えられる。

(3) 尖頭状骨角器

単純尖頭状骨角器と錐形尖頭状骨角器に分類される。なお、単純尖頭状骨角器に分類された破損資料のうち、本来はヤス先状骨角器の形態を有していたと推定される資料については、その都度記述した。

・単純尖頭状骨角器 (図 3-1 ~ 3・図 4-1 ~ 8・図 5-1 ~ 10・図 5-1 ~ 20)

41 点を図示した。シカの中手骨・中足骨製の資料は図 3-1 ~ 3 および図 4-1 ~ 5 の 8 点、鹿角製は図 4-6・7 の 2 点、イノシシ骨製は図 4-8 の 1 点、小動物骨製は図 5-1 ~ 5 の 5 点、鳥骨製は図 5-6・7 の 2 点、陸棲哺乳類骨製は図 5-8 ~ 10 および図 5-1 ~ 20 の 23 点である。

図 3-1 はシカの中足骨製で、溝をつけた後、打ち割りのように力を加えて分割されたことがうかがえる。その後、先端部が研磨される。図 3-2 は完全に擦り切りで分割され、先端が研磨される。図 3-3 は図 3-1・2 とは異なり、打ち割りで分割された骨片を研磨して整形する。裏面には貫通していないが、回転穿孔を試みた痕跡が見られる。何らかの理由で穿孔を中止したものと考えられる。図 4-1 は分割面が湾曲しており、擦り切りによる分割では通常直線的な分割面となるため、打ち割り分割を行った後、丁寧に研磨を施した可能性がある。図 4-2 ~ 5 は擦り切りによる分割で、器体全体に縦の擦痕が見られるが、いずれも上部が欠損する。図 4-2 のみ細身の資料である。形態から、図 4-1・3・4・5 はヤス先状骨角器の可能性はある。鹿角を使用した図 4-6・7 は、上部に抉りのような構造を持ち、勾玉のように器体が膨らみ、下部に行くにつれて湾曲しながら細くなる。図 4-8 はイノシシの腓骨製で、先端部を打ち割った後、その部分を研磨する。

図 5-1・2 はノウサギの脛骨、図 5-3 はムササビの脛骨、図 5-4 はタヌキの尺骨、図 5-5 はタヌキの橈骨を素材とする。いずれも近位端を残し、遠位端を打ち割った後に研磨する。鳥骨製の図 5-6・7 はいずれも扁平な資料で、上部が欠損しており、図 5-6 は打ち割られている。図 5-8・9 は細身で扁平な資料であり、もともと細身の素材が使用されていたことがうかがえる。図 5-10 は器体がわずかに湾曲する。図 6-1 は上部が欠損する扁平な資料である。図 6-2・3 は擦り切りで分割され、図 6-4 は管骨を打ち割りで分割した後に研磨される。図 6-5 は上部が欠損した逆二等辺三角形の形状をする。図 6-6 は扁平な資料で、擦り切りで分割される。図 6-7 は打ち割りで分割された後、研磨によって形作られたものと推定される。図 6-8 は先端部を打ち割った後に研磨されており、もともとは上部が広がった団扇のような形状であったと推定されるが、欠損する。欠損部が多いため決定的な形状は不明だが、擦り切りによる穿孔が行われていた可能性がある。図 6-9 ~ 15 は全て上部が欠損した細身の資料であり、擦り切り分割の後に研磨される。特に図 6-10 は、光沢が出るほど研磨される。これらは完形であればヤス先状骨角器になる可能性がある。図 6-16 ~ 18 は多くが欠損しており、先端部のみが残存する。図 6-19 は表面の剥落が多く、先端部が欠損する。図 6-20 も先端部が欠損するが、丁寧な研磨が施される。

・錐形尖頭状骨角器 (図 7-1 ~ 6)

先端部を錐形に作出する資料で 6 点図示した。1 は部位同定が不可能であった。上部を欠損するが、先端は錐形に細くなる。2 はシカの中足骨が使用され、他の資料とは作りが明らかに異なり、基部には横方向および縦方向から回転穿孔で孔が 2 つ穿たれる。また、器体は他の資料に比して太い。3 はタヌキの脛骨の遠位端を錐形に作っている。4 は 1 と同様に細い資料である。上部を欠損する。5 は管骨

を擦り切りで分割しており、先端部を研磨で細く作出する。上部を欠損する上に、表面は剥落が多い。

(4) ヤス先状骨角器 (図 7-7)

1 点を図示した (図 7-7)。シカの中手 / 中足骨が擦り切りで分割される。

(5) 針状骨角器 (図 8-1 ~ 8・図 9-1 ~ 13・図 10-1 ~ 18)

38 点を図示した。細別は福井の論考に従った (福井 2019)。筆者が観察できたすべての資料において、穿孔後に研磨が施される。

大型の資料は図 8-1 の 1 点である。この資料はシカの中手骨または中足骨を素材としており、回転穿孔が行われるが、穿孔部で破損する。裏面には穿孔部の左下にわずかに円形の窪みがあり、未貫通ではあるが、回転穿孔を試みた痕跡と考えられる。破損後に穿孔をやり直そうとした可能性がある。図 8-2 ~ 4 は扁平な資料であり、いずれもシカまたはイノシシの肋骨製である。図 8-4 は穿孔部で破損するが、穿孔部が残る図 8-2・3 はいずれも擦り切り穿孔で行われる。図 8-5 ~ 8、図 9-1 ~ 13、図 10-1 ~ 5 は中型の資料に分類される。図 8-5 は中型の中でも長大な資料で、シカの中手骨または中足骨製であり、擦り切り穿孔で加工される。図 8-6 ~ 8 は中型のうち長針に分類され、穿孔部に破損が見られない資料である。図 8-6 は回転穿孔が行われ、図 8-7・8 は擦り切り穿孔と回転穿孔が併用される。

図 9-1 ~ 5 は中型の長針で、穿孔部が破損する資料である。いずれも穿孔の半分より上が欠損するが、残存部から判断するとすべて擦り切り穿孔と回転穿孔が併用される。形状については、図 9-3 のみ胴部がわずかに膨らむ特徴がある。

図 9-6 ~ 10 は中型の中針で、全体形状が判明する資料である。図 9-6 のみ回転穿孔であり、図 9-7・8 は擦り切り穿孔、図 9-9・10 は両者が併用される。図 9-9 は穿孔部の側面がわずかに欠損しており、穿孔時の欠損と推定される。図 9-6 は細身の資料だが、図 9-7・8 は器体が太い。図 9-9 は穿孔の下部で急激に細くなり、図 9-10 は逆二等辺三角形のような形状をする。

図 9-11・12 は穿孔部で欠損しており、穿孔部より上の形状を判断することはできない。いずれも穿孔の上半分が欠損しており、擦り切り穿孔と回転穿孔が併用される。図 9-13 は中型の短針に分類され、回転穿孔のみで加工される。器体の中ほどに段差を持ち、穿孔が器体の約 3 分の 1 に位置するため、他の針状骨角器より低い位置にある。図 9-10 のような資料が破損した後に再利用された可能性がある。中型の資料のうち破損が多いものが図 10-1 ~ 5 である。図 10-1 は鹿角製で、器体の下半分が欠損する。図 10-2・4・5 は器体の下半を、図 10-3 は穿孔部と先端を欠損する。穿孔については、図 10-1 は擦り切り穿孔、図 10-2 ~ 4 は擦り切り穿孔と回転穿孔が併用され、図 10-5 は回転穿孔で加工される。なお、中型の資料のうち、図 10-5 は中期中葉の資料である。細型の資料は図 10-6 ~ 16 の 11 点が出土した。これらはすべて穿孔部が最大幅であり、胴部に膨らみは見られない。素材を特定できたのは宮坂発掘資料の図 10-6 のみで、エイの尾棘を素材としており、両側の棘状の凹凸が除去される。擦り切り穿孔で加工されたと考えられる。図 10-7 は回転穿孔、図 10-8 は擦り切り穿孔、図 10-9 は両者が併用される。宮坂資料の図 10-10 ~ 12 は写真が不鮮明であるが、回転穿孔が行われたと推定され、図 10-13 ~ 16 は擦り切り穿孔が行われたと推測される。図 10-17・18 は器体の細さと尖った形状から針状骨角器に分類されたが、破損部分が大きく、細分類はできなかった。図 10-17 は大給の論考 (大給 1935) で報告されたエイの尾棘製の資料である。図 10-18 は大部分を破損しており、動物種・部位は不明である。

(6) へら状骨角器 (図 11-1 ~ 6)

図 11-1 ~ 6 の 6 点を図示した。図 11-1 はツキノワグマの尺骨製と考えられる。遠位端を斜めに擦

り切り、下部のみ研磨が施される。図 11-2～5 は鹿角製の資料である。切断法について、図 11-2 は擦り切り時に残る横方向の線状痕が観察できないため、打ち割り後に研磨されたものと推定される。図 11-4 は擦り切りで切断される。分割法については、図 11-2 および図 11-4 では幹部を縦に擦り切り分割した後、一方を研磨してへら状に成形する。一方で、図 11-3 および図 11-5 は写真が不鮮明であるものの、形態や使用部位が類似するため、同様の方法が取られていたと考えられる。また、鹿角製のへら状骨角器については、図 11-2 と図 11-3、図 11-4 と図 11-5 というセット関係で、非常に類似する形態の資料が確認された。図 11-6 はシカの大腿骨と推定される管骨を打ち割り、その破片の一方を研磨したものである。

(7) 鹿角穿孔加工品 (図 12-1～8)

図 12-1～8 の 8 点を図示した。鹿角の幹部を縦方向に擦り切り分割し、一方を尖らせ、もう一方に穿孔を施す。すべての穿孔は回転穿孔で行われており、穿孔部の上には、紐をくくりつけた際に生じたと考えられる痕跡が残されている。ここでは、出土資料を A 類～C 類の 3 つの類型に分類することが可能である。

A 類：器体が細く、膨らみのないもの (図 12-1)。

B 類：器体が膨らむが、幅が 12mm 未満の細身のもの (図 12-2)。

C 類：穿孔の下部で幅が 12mm 以上に大きく膨らみ、先端に向かって細くなるもの (図 12-3～7)。

さらに、C 類は以下の 2 つに細分できる。

C-1 類：図 12-3 のみ。側面が膨らまず、両端が平行に近い形状を持つもの。

C-2 類：図 12-4～7 のように、側面も膨らみ、先端に向かって細くなるもの。

なお、図 12-2・3・4 は先端部が破損する。C 類については、先端部が残存する資料から判断すると、錐形に尖るのが基本形態であると考えられる。図 12-8 は、図 12-1～7 の形状を踏まえると、下半分が欠損した資料を再研磨したものと推定される。この資料は過去に「有孔刺突具」と報告されている (八戸市博物館 1988)。しかし、図 12-8 が再加工されたものであると考え、刺突機能を失った後も、何らかの使用目的を持って再利用されたことが示唆される。したがって、刺突という機能よりも、むしろ垂れ下げる用途が重視されていた可能性がある。ただし、現時点では同時期の津軽海峡沿岸域や三陸海岸沿岸域における出土例は確認されていない。今後の資料増加が期待される。

(8) 針入れ形骨角器 (図 13-1～6)

6 点を図示した。いずれも鳥骨製で、欠損品である。図 13-4～6 は縦半分が欠損し、トンネル状の断面形を呈す。図 13-1～4 には線刻が巡り、装飾性が認められる。これらはすべて中期後葉の資料である。

(9) 鯨骨製品 (図 13-7・8)

2 点を図示した。いわゆる「骨斧」などと呼ばれる資料をこの分類に含めた。図 13-7 は上部が、図 13-8 は下部が欠損する。また、図 13-8 は写真が不鮮明であるが、回転穿孔と思われる孔が確認できる。

(10) 器種不明品・破損品 (図 13-9・10)

器種が不明、または破損が大きい資料である。図 13-9・10 の 2 点を図示した。いずれも鹿角製で、縦に擦り切り分割される。いずれも破損が見られるが、図 13-9 は叉状部と思われ、穿孔が施される。

(11) 装飾品 (図 14-1～9)

9 点を図示した。これらは針状品、櫛状品、その他に分類される。針状品は 4 点ある (図 14-1～4)。図 14-1 は鹿角製と思われる。基部が横長に膨らみ、先端部は欠損するが、釣り針のように湾曲していたと推測される。図 14-2 はイノシシの腓骨製で、遠位端が細く研磨され、針状に加工される。図

14-3は基部が膨らみ、線刻が施される。図14-4は基部が楕円形に膨らみ、先端が錐状に細くなっている。櫛状品は1点図示した(図14-5)。鹿角製で、縦長の長方形の基部から5本の細い「歯」が伸びている。歯のうち1本は根本で折れ、2本は途中で折れている。残存する歯は2本である。全体的に擦り切り加工が施され、丁寧に研磨される。針状・櫛状に分類できないその他の製品は4点を図示した(図14-6～9)。図14-6は鯨骨製と思われ、太い棒状で円形の基部を持つ。丁寧に研磨される。図14-7～9は破損品である。図14-7は鹿角製で穿孔がある。図14-8は薄い断面形状を呈し、穿孔および線刻が施される。図14-9も線刻が施される。これらは中期後葉の資料である。

(12) 貝製品(図14-10～12)

3点を図示した。図14-10は中央に穿孔が施される。図14-11・12はいずれも破損し、全体形は不明だが穿孔が確認できる。図14-12は穿孔部で破損する。

(13) 加工痕が残る資料(図15-1～12)

12点を図示した。図15-1～5は鹿角製で自然面を残す。図15-1～3は縦に擦り切りで分割される。図15-2は器体の中央に縦方向の擦り切り痕があり、さらに分割を行う予定であったと考えられる。図15-4は分割された資料の上部が特徴的な形に加工されており、まるで青森県の形を想起させる。グリップ付きの釣り針形骨角器の製作途上品である可能性がある。図15-5は下半分が欠損しており、擦り切りで分割される。図15-6は陸生哺乳類の管骨を打ち割りで分割したもの、図15-7は鳥骨製で、欠損が大きい上部には石器による切り込みが確認される。図15-8～10は鹿角製で、細い筒状に加工され、擦り切りで分割される。同一の素材から切り取られた可能性があると言われている(八戸市教委2018)。図15-11は海獣骨で板状に加工される。図15-12:素材の部位は不明だが、棒状に加工される。図15-8～12は中期後葉の資料である。

(14) 泉山コレクション中の晩期の資料と動物遺体(図16-1～3)

泉山コレクションとして保管されていたが、骨の質感から貝塚ではなく低湿地、恐らく是川中居遺跡から出土した可能性が高い。また、同時に型式学的にも後・晩期に属すると考えられる遺物をここに分類する。図16-1は組み合わせ式のヤス先状骨角器の基部である。このタイプの資料は縄文時代後期～晩期の三陸沿岸～仙台湾で出土する。図16-2は「根挟み」と呼ばれる資料である。晩期に出土のピークを持ち、スリットから半分が欠損する。多数の報告例がある田柄貝塚では、スリットから半分以上を欠損する資料が一定数あり、使用時の衝撃による破損が想定される(宮城県教育委員会1986)。また、図16-2の茎部にはアスファルトが付着しており、着柄されたことが伺える。いずれも、中居遺跡出土の晩期に帰属する資料の可能性が高い。図16-3はイノシシの右下顎犬歯である。折れているものの、明確な研磨痕などの加工痕跡が観察できなかったため、骨角器には含めなかった。

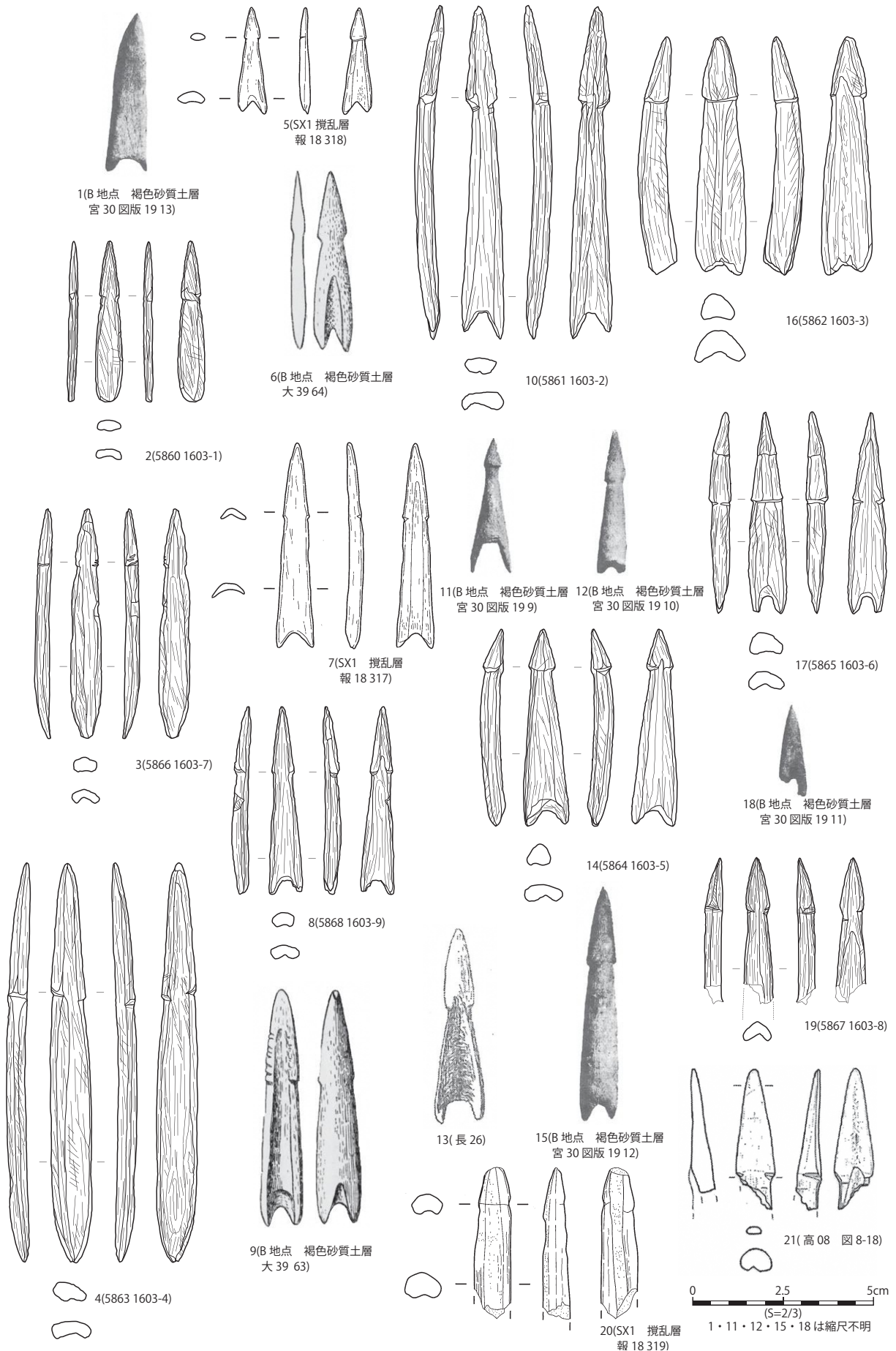


図2 是川一王寺遺跡出土銚頭状骨角器

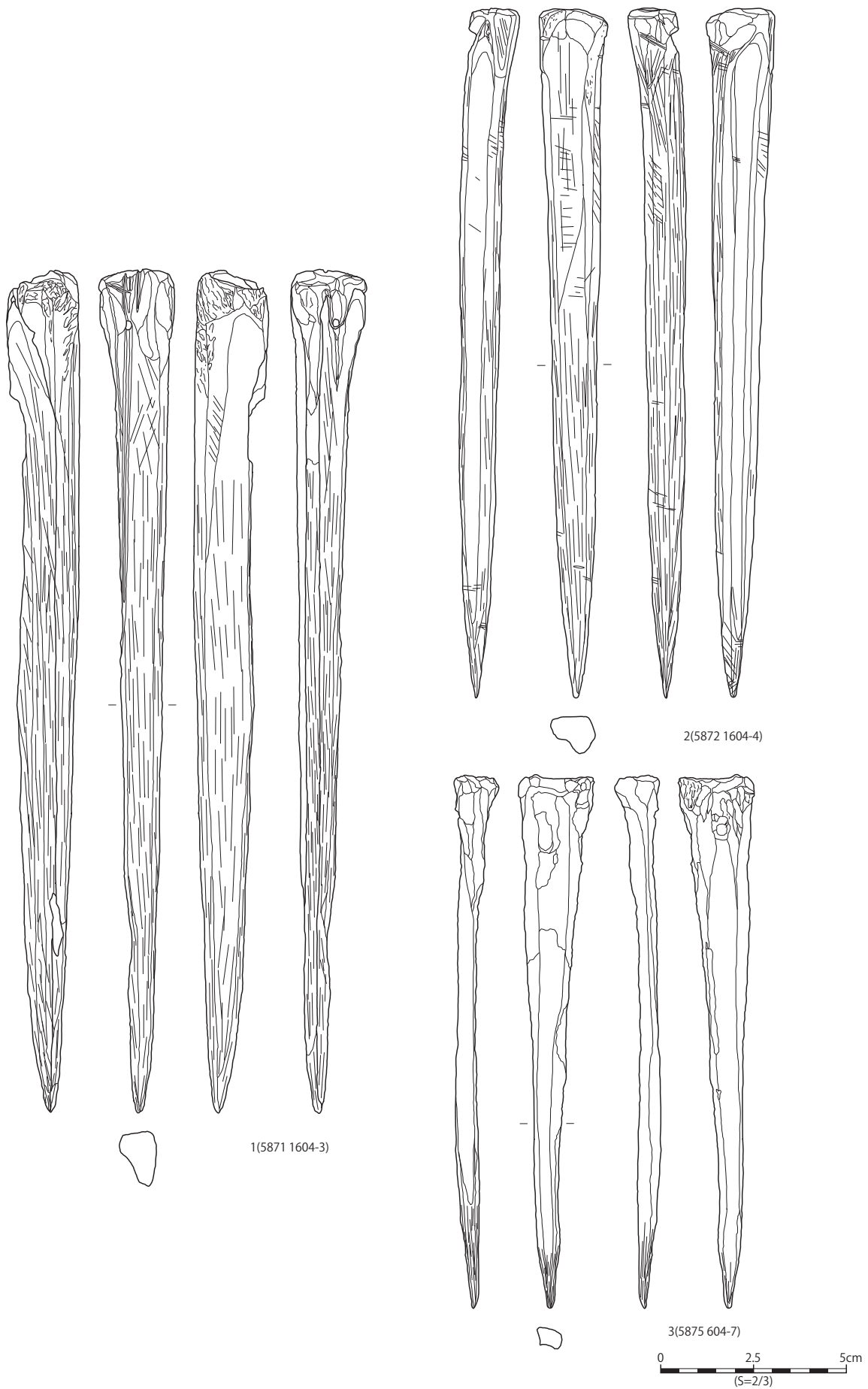


图3 是川一王寺遺跡出土尖頭狀骨角器

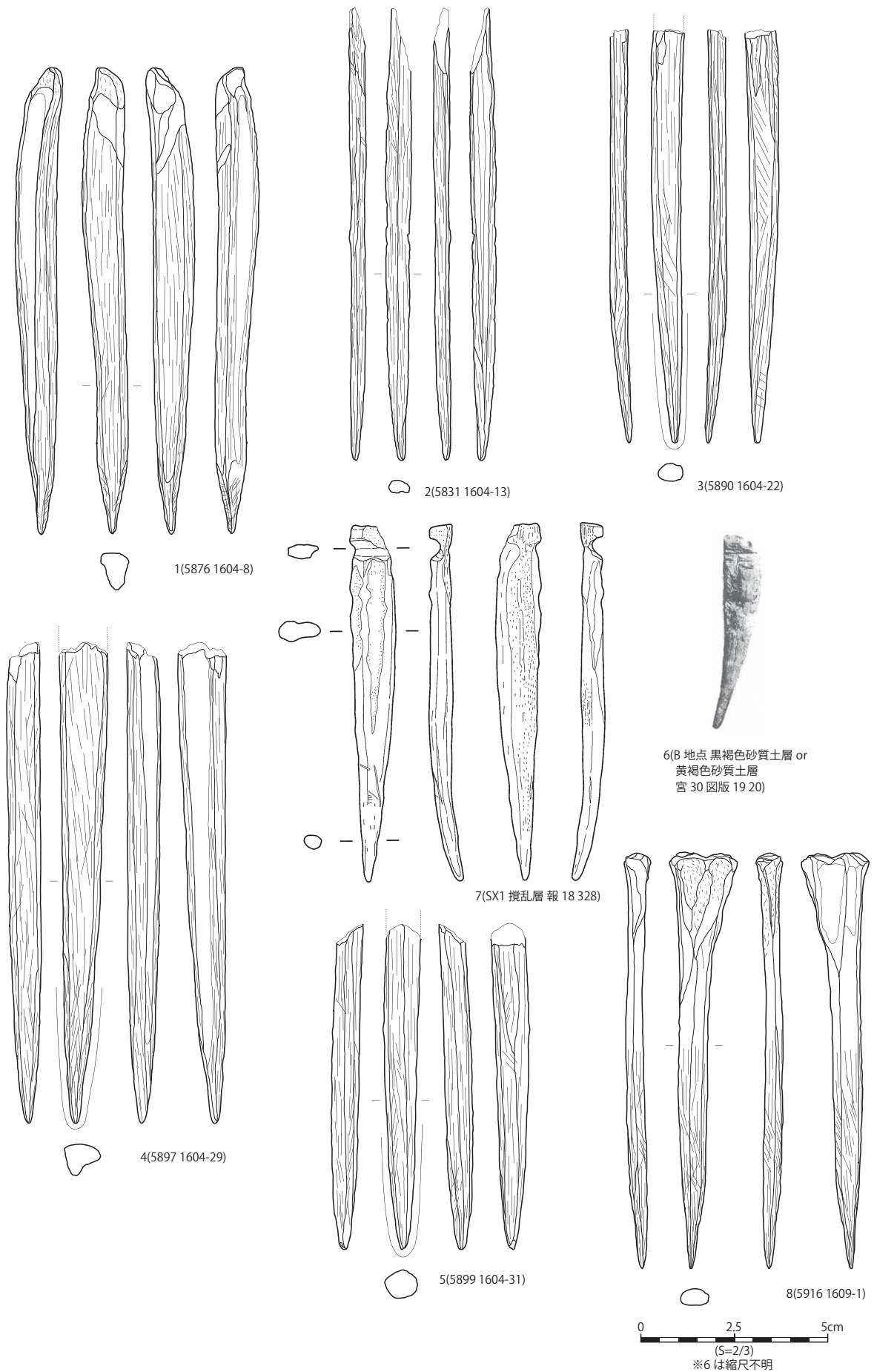


図4 是川一王寺遺跡出土尖頭状骨角器

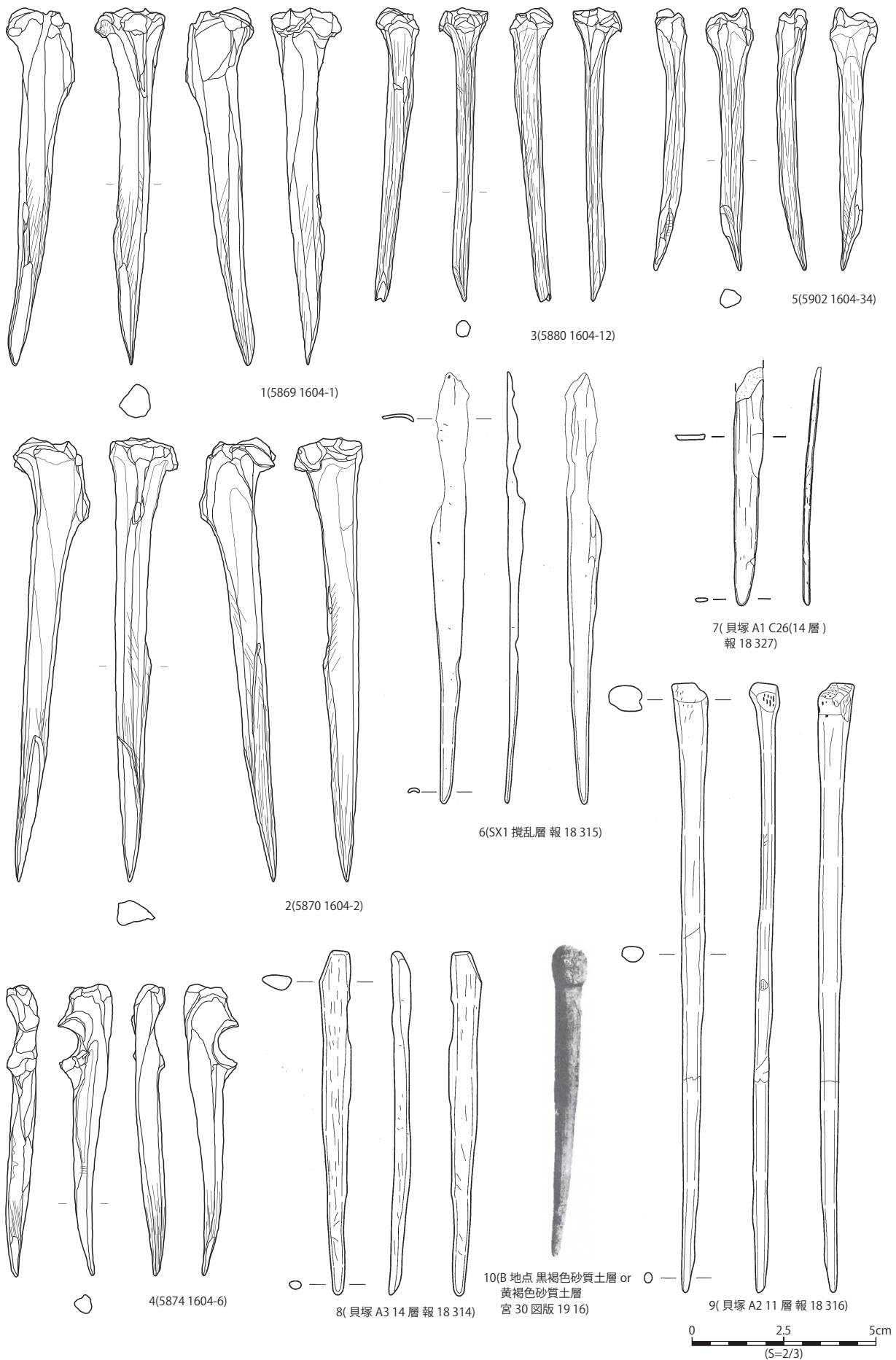


图 5 是川一王寺遺跡出土尖頭狀骨角器

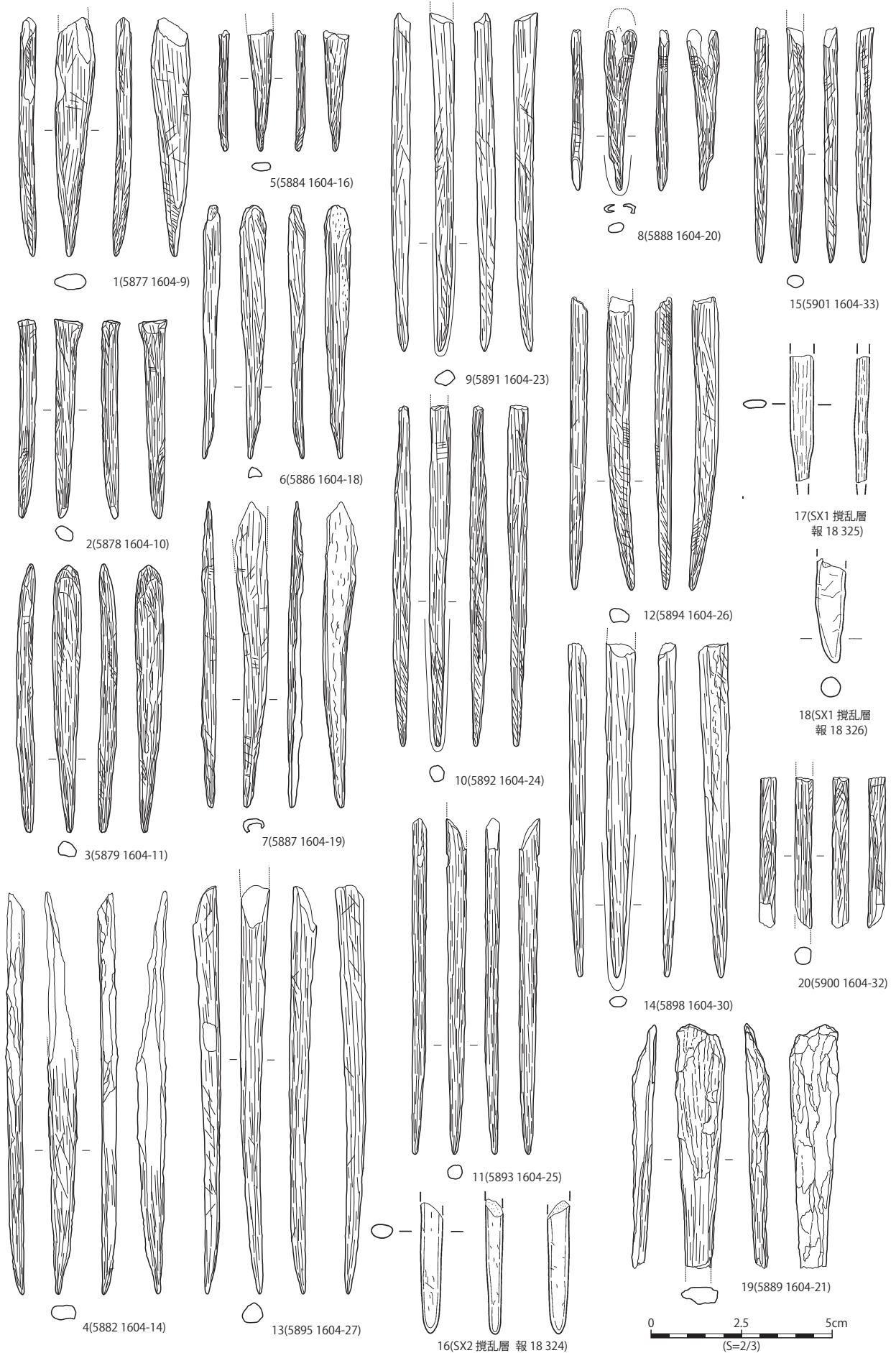


図6 是川一王寺遺跡出土尖頭状骨角器

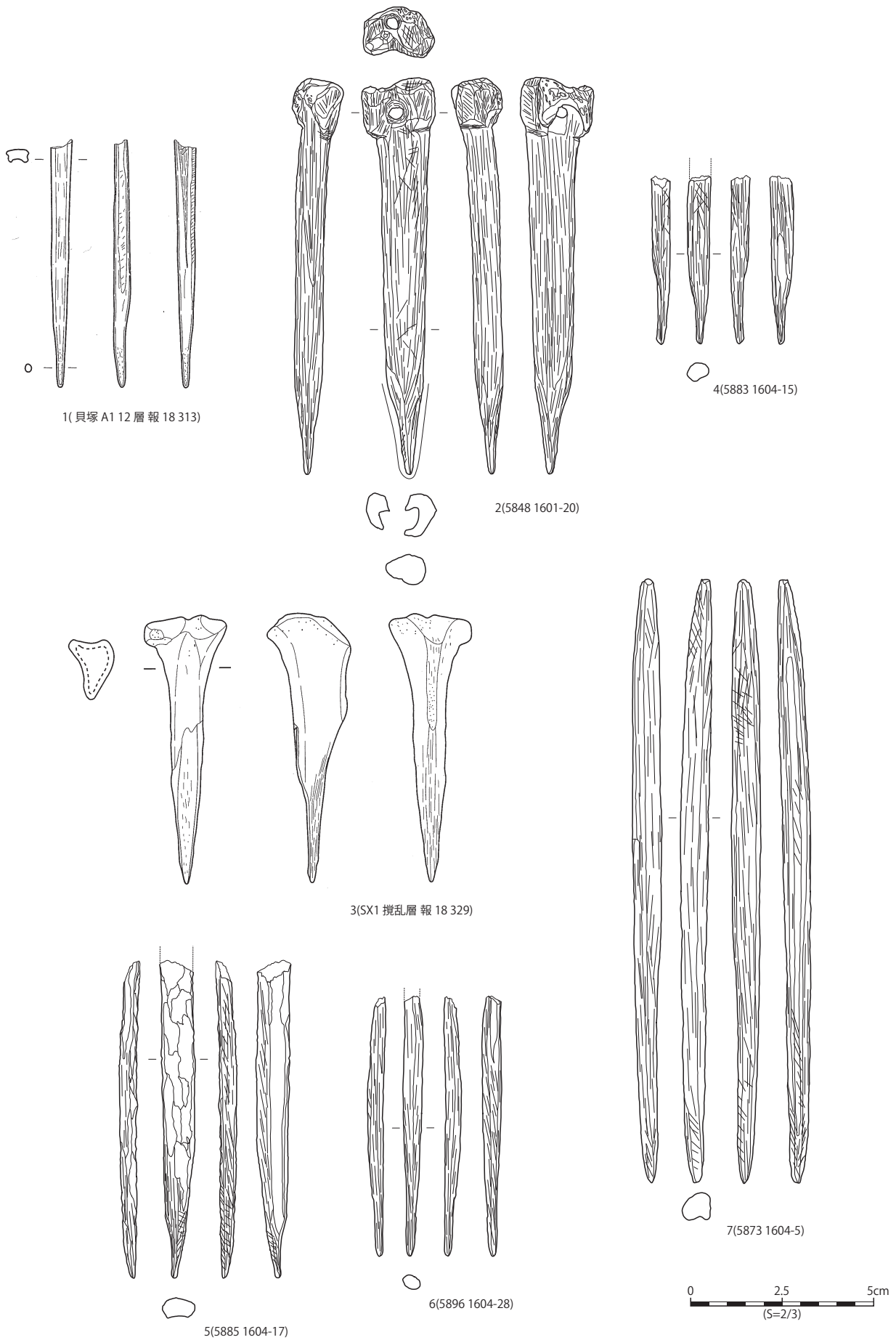


図7 是川一王寺遺跡出土尖頭状骨角器・ヤス先状骨角器

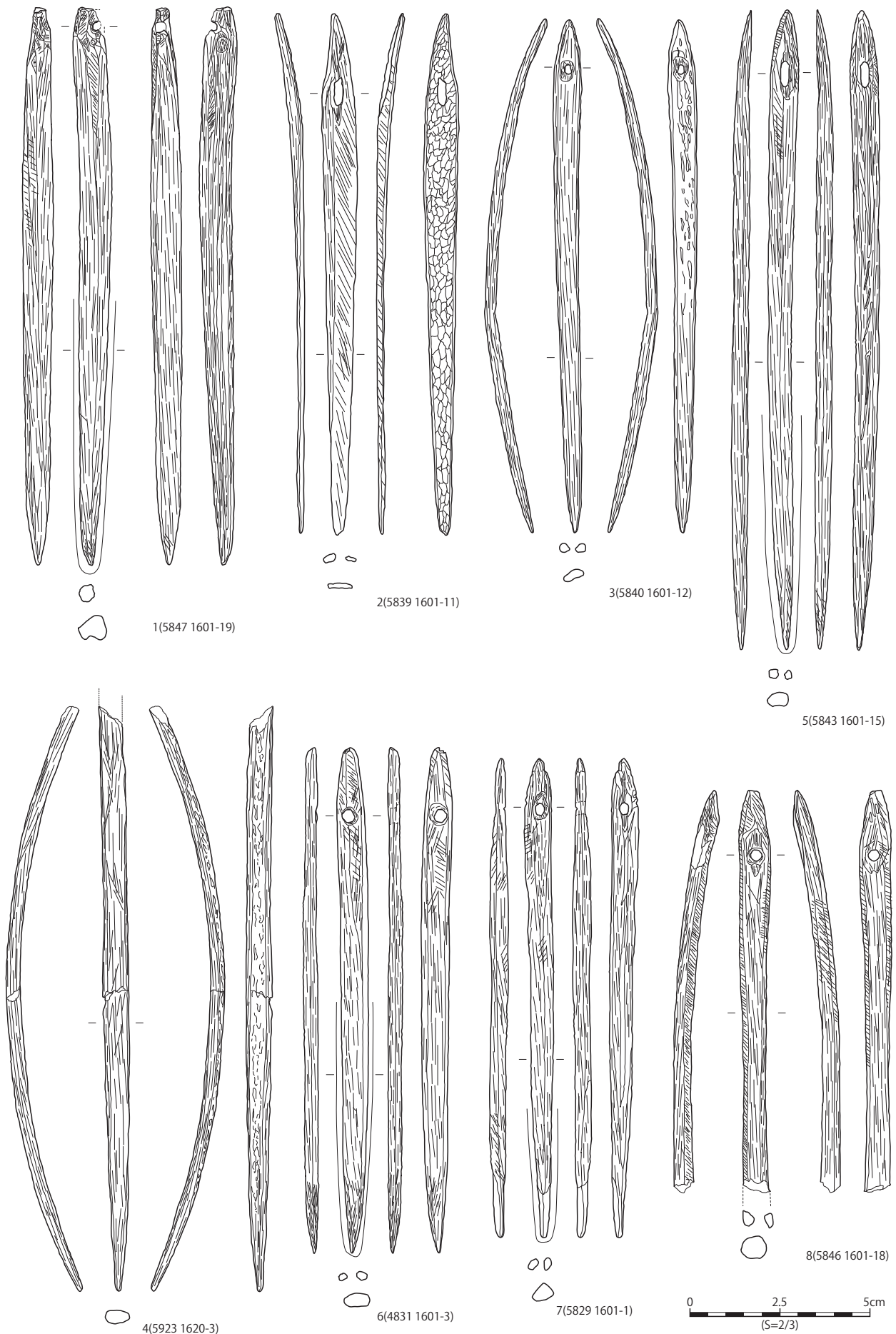


図8 是川一王寺遺跡出土針状骨角器

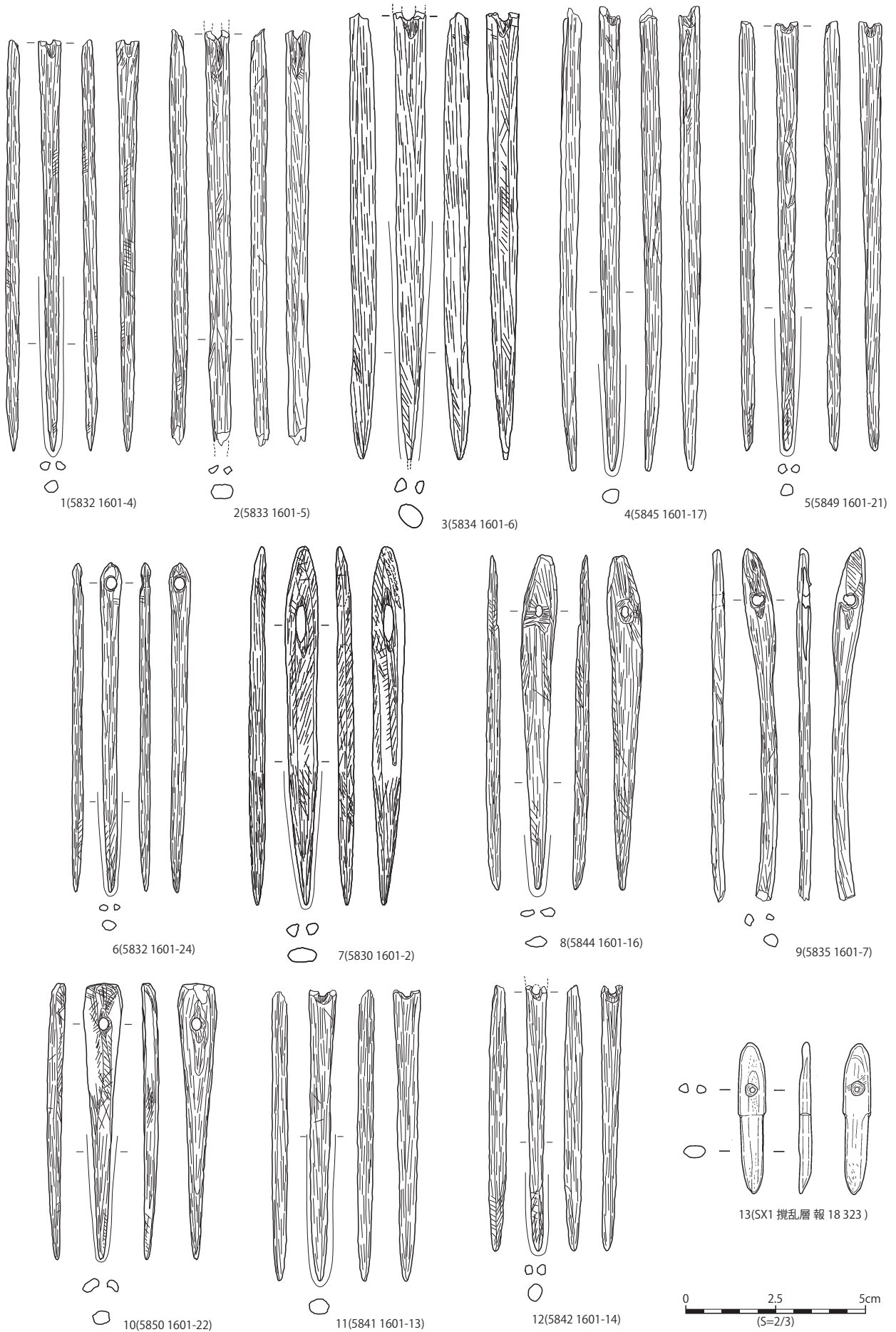


图9 是川一王寺遺跡出土針狀骨角器

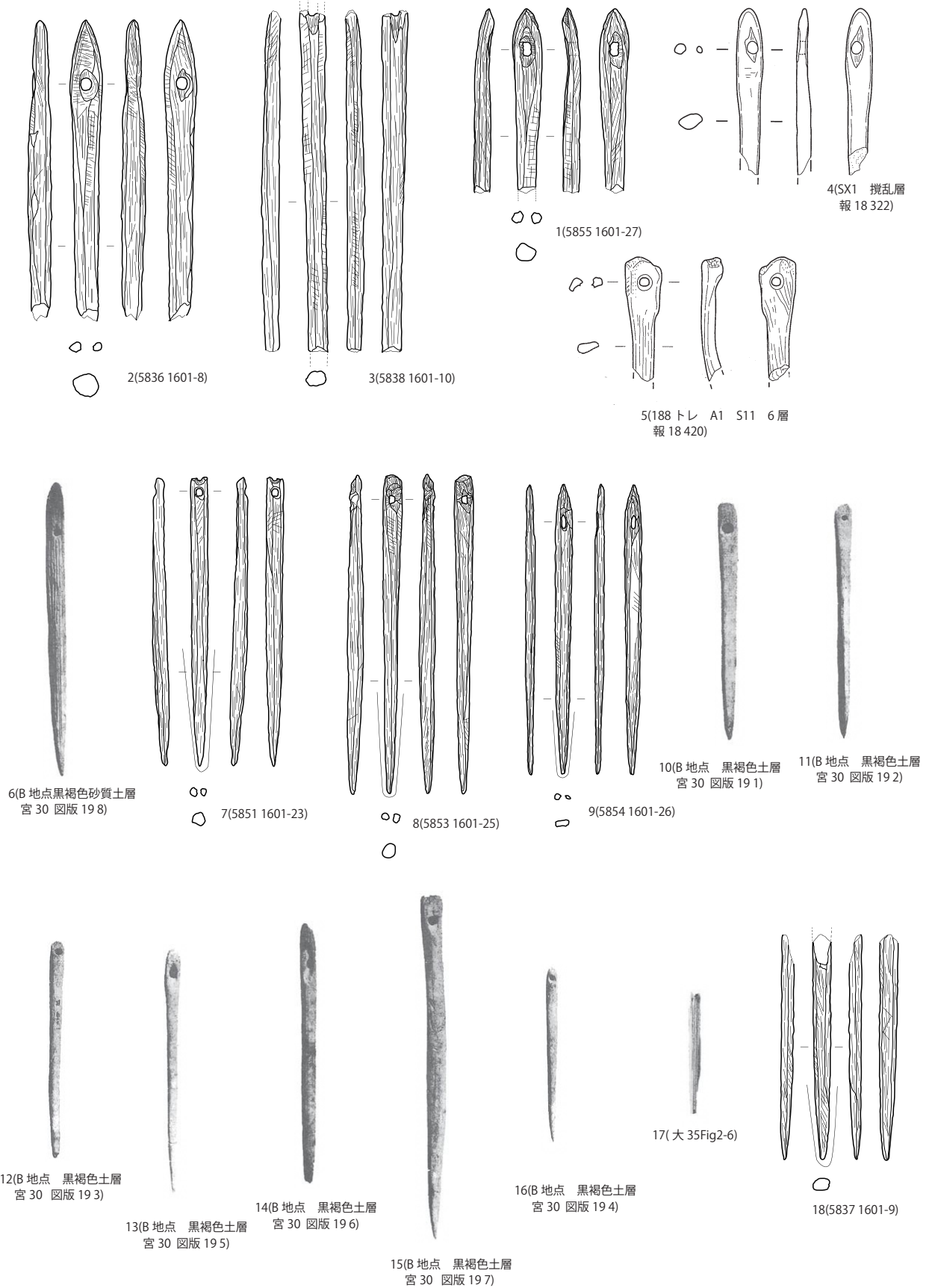


図 10 是川一王寺遺跡出土針状骨角器

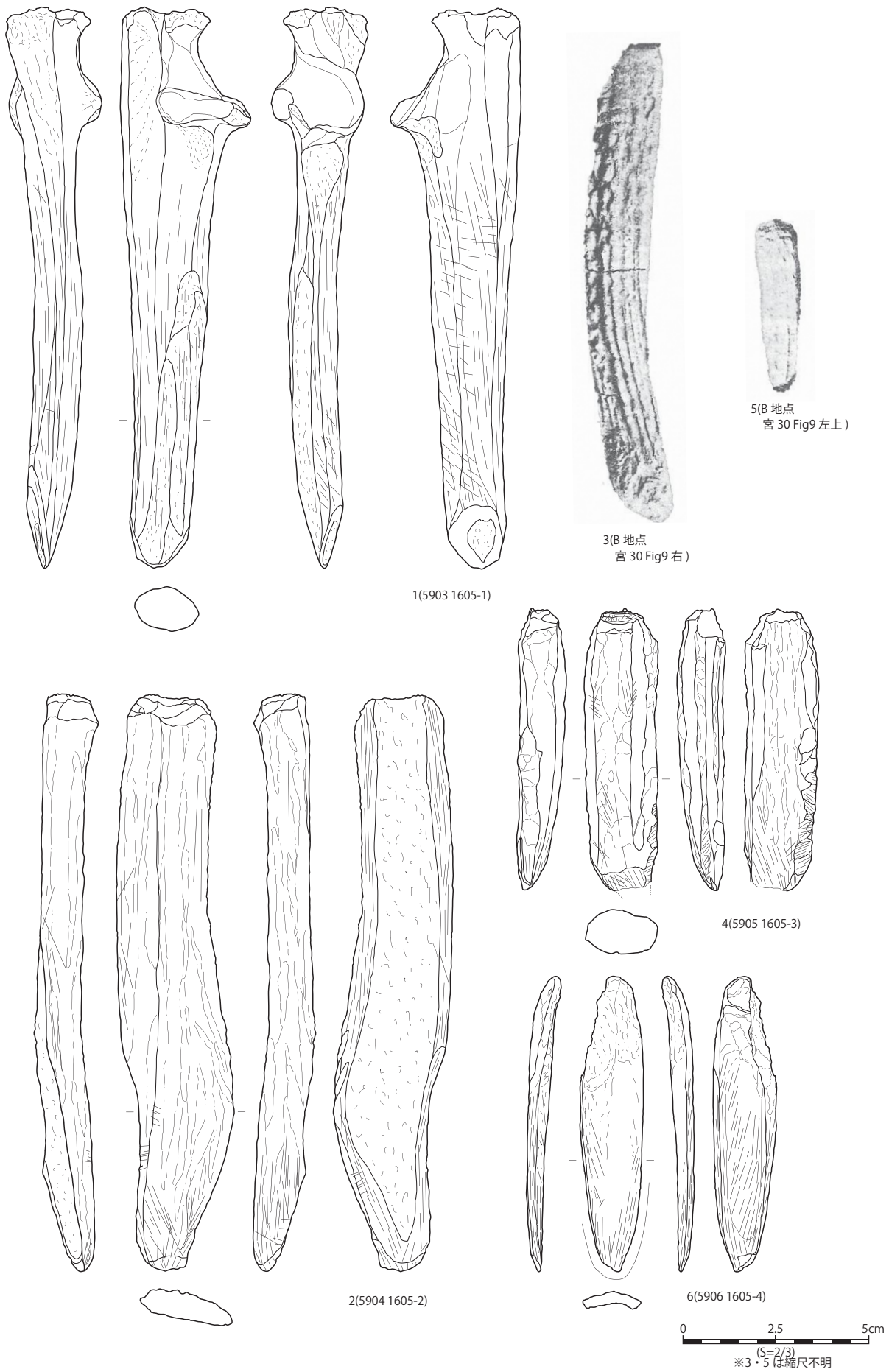


図 11 是川一王寺遺跡出土へら状骨角器

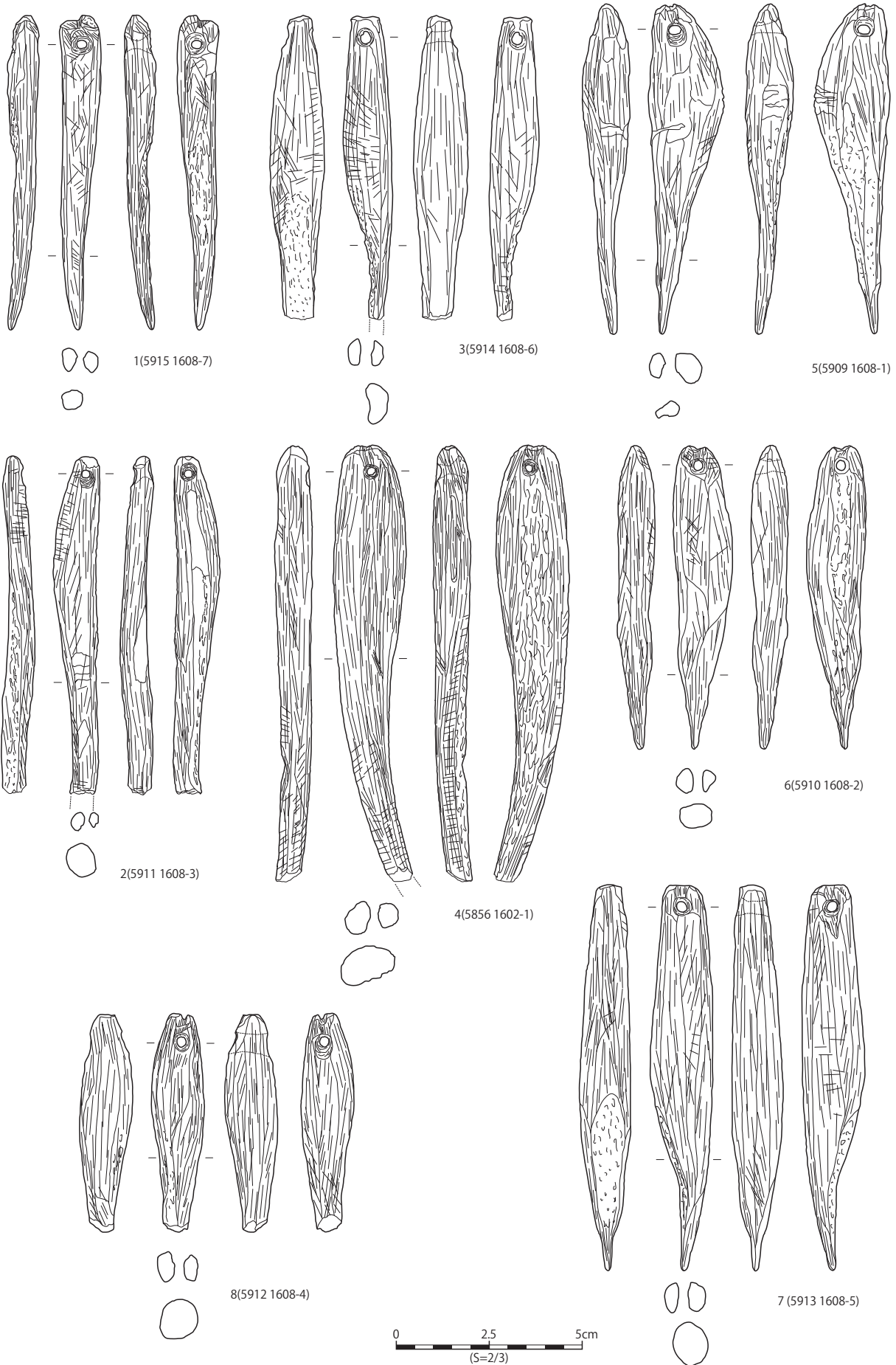


図 12 是川一王寺遺跡出土鹿角穿孔加工品

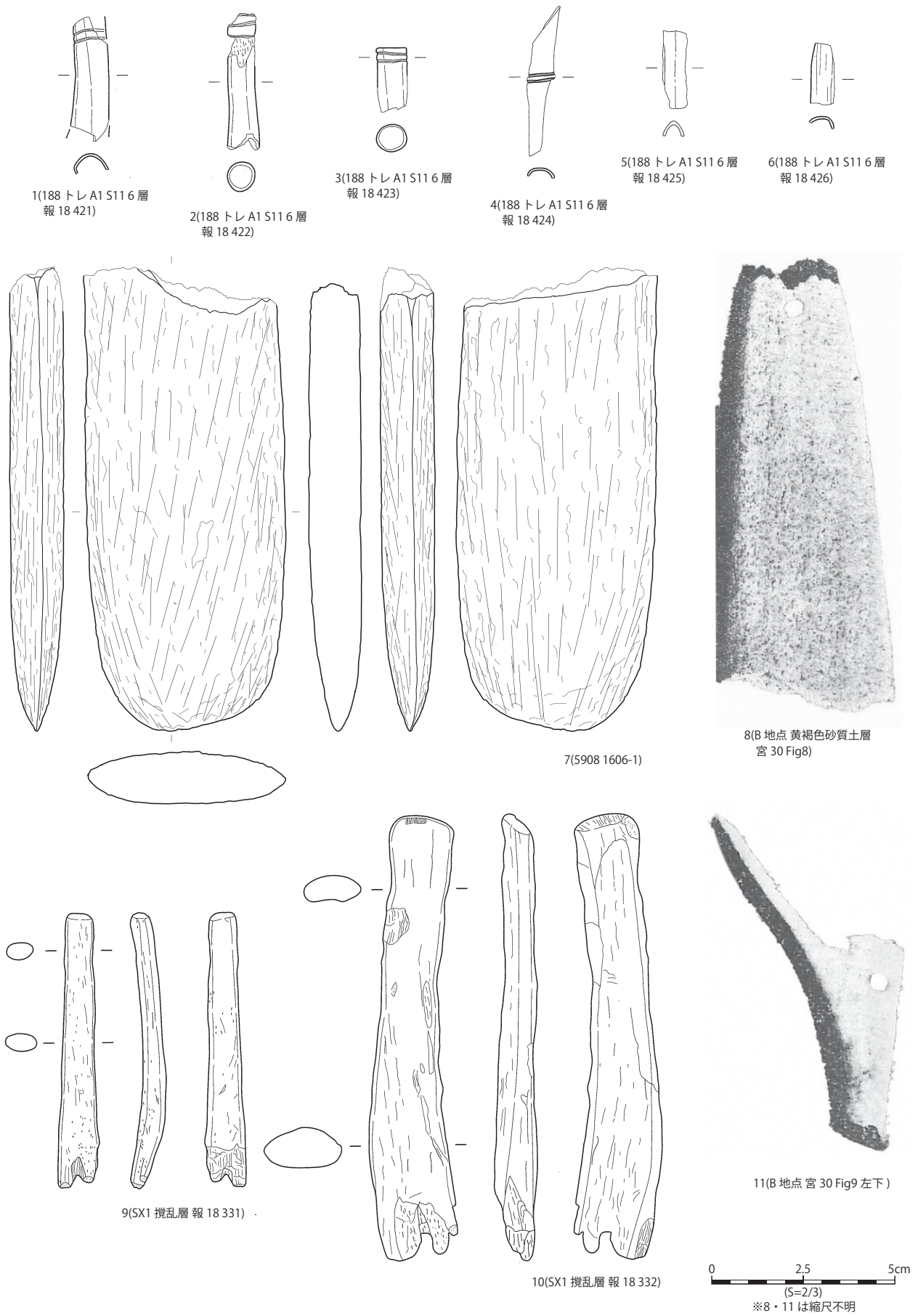


図 13 是川一王寺遺跡出土針入れ形骨角器・鯨骨製品・器種不明品・破損品

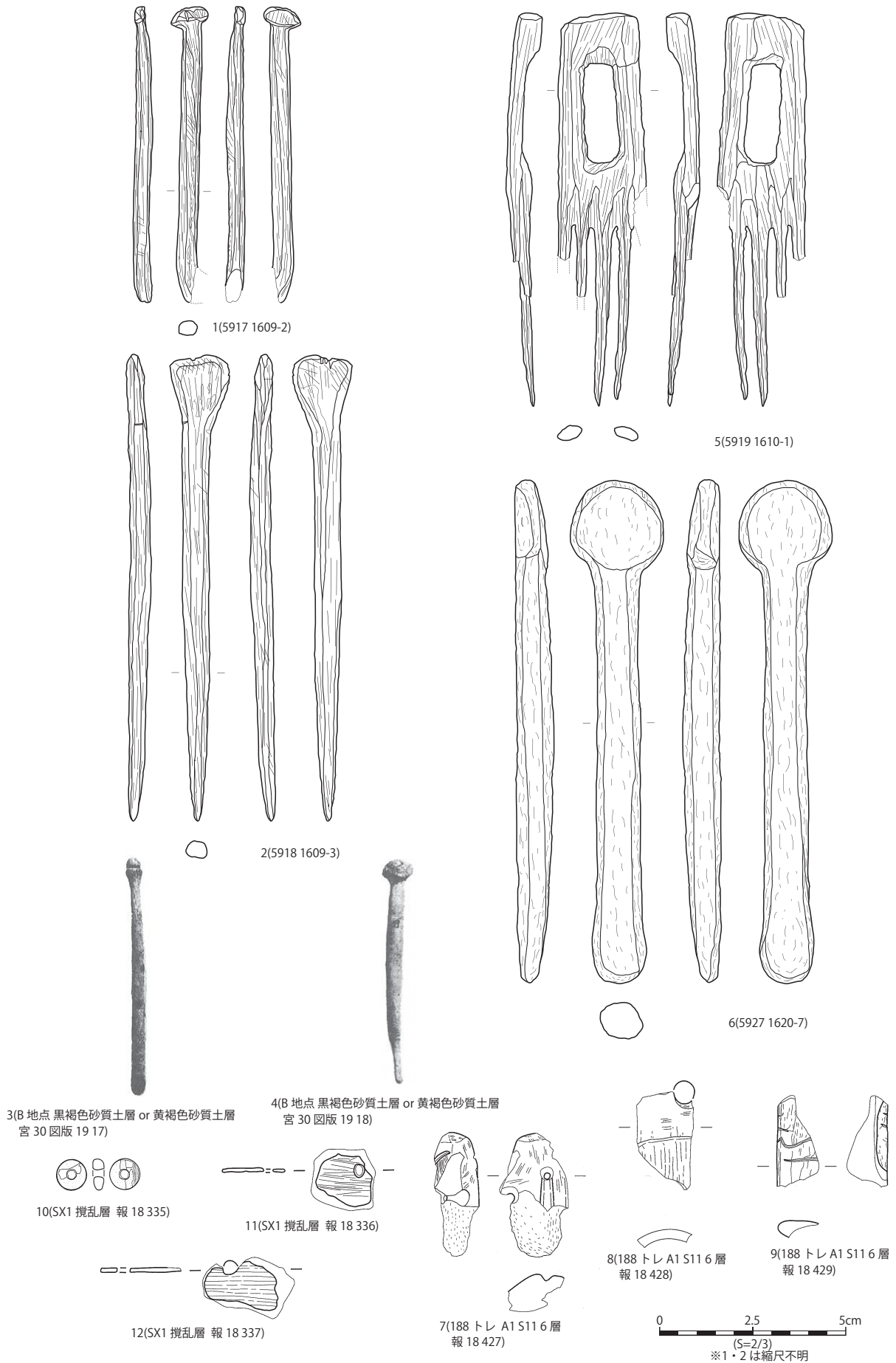


図 14 是川一王寺遺跡出土装飾品

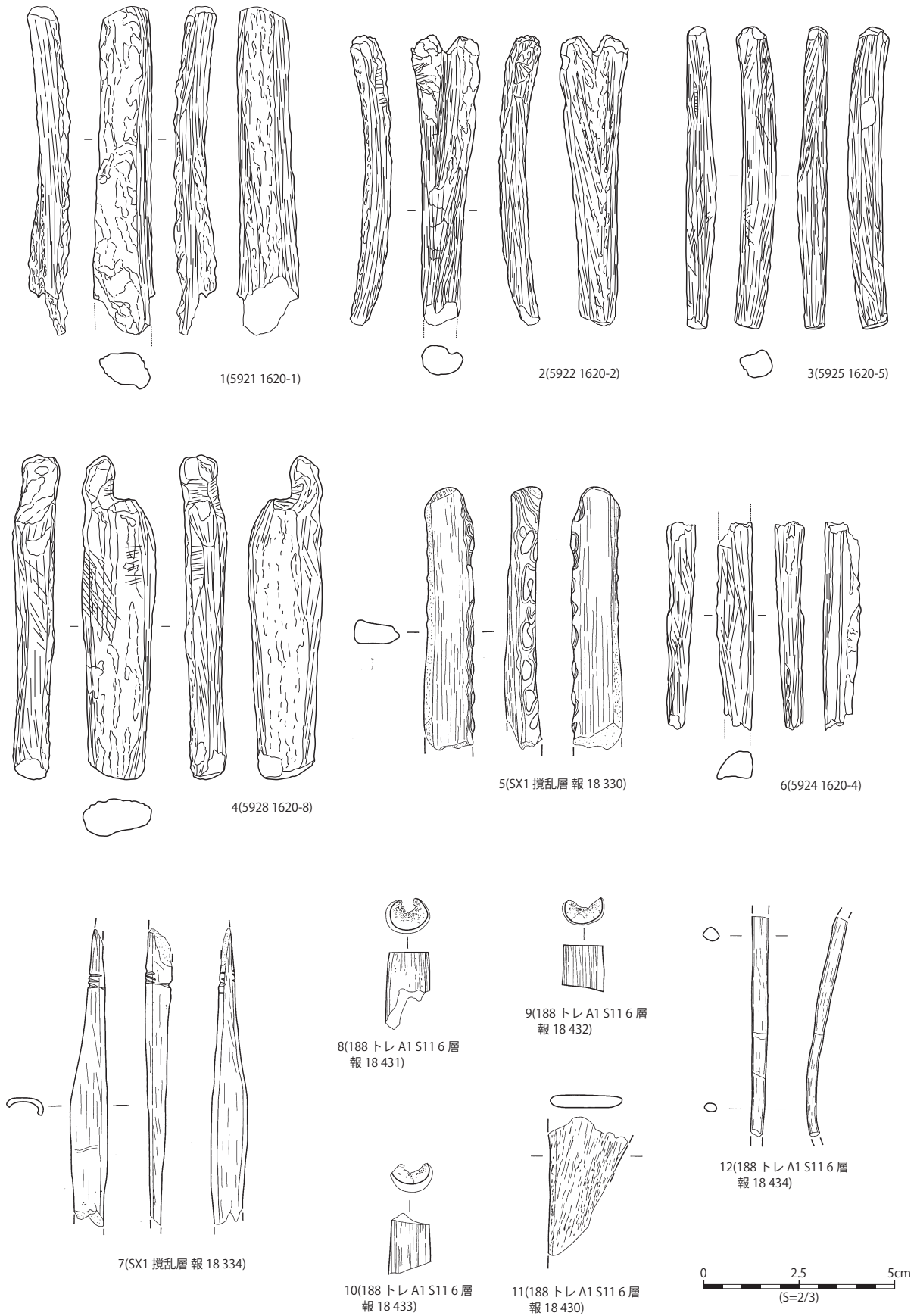


図 15 是川一王寺遺跡出土加工痕が残る資料

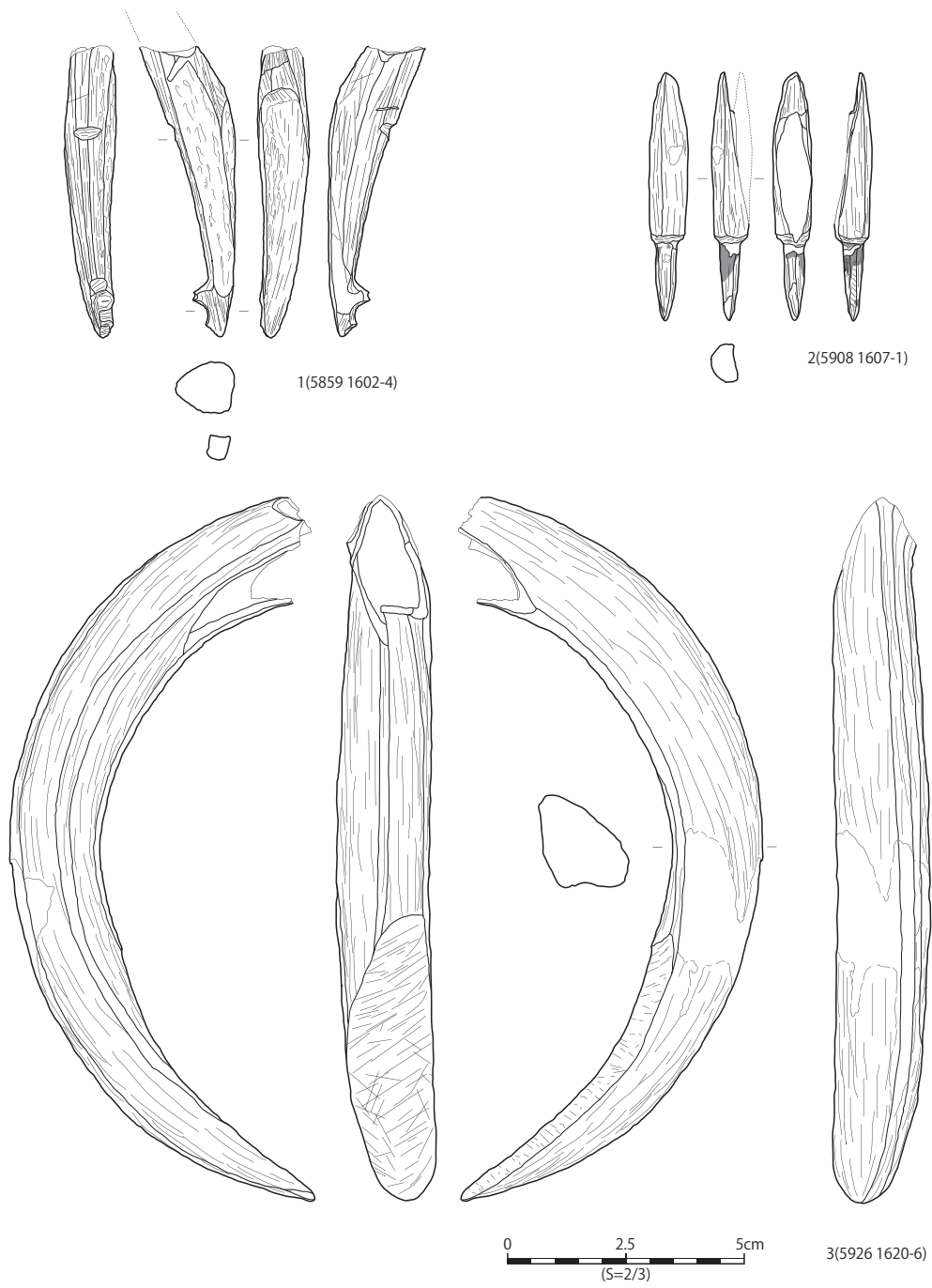


図 16 是川一王寺遺跡出土ヤス先状骨角器・鏃形尖頭状骨角器・歯牙

表1 是川一王寺遺跡出土泉山コレクション骨角器観察表

番号	ID	図番	器種	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	動物種	部位	左右
1602-3	5858	1 1	鈞針形骨角器	前期	47.9	26.1	7.9	4.04	シカ?	角?	
1602-2	5857	1 5	鈞針形骨角器	前期	(60.8)	12.5	11.3	(7.00)	シカ	角	
1603-1	5860	2 2	銚頭状骨角器	前期	44.2	7.2	2.1	0.86	陸棲哺乳類	部位不明	
1603-7	5866	2 3	銚頭状骨角器	前期	62.5	8.0	3.6	2.03	陸棲哺乳類	部位不明	
1603-4	5863	2 4	銚頭状骨角器	前期	110.5	11.1	5.1	7.88	シカ?	中手/中足骨?	
1603-9	5868	2 8	銚頭状骨角器	前期	51.7	8.9	3.8	1.31	シカ	角	
1603-2	5861	2 10	銚頭状骨角器	前期	91.4	11.2	4.9	5.16	シカ?	中手/中足骨?	
1603-5	5864	2 14	銚頭状骨角器	前期	54.2	12.1	5.5	2.89	陸棲哺乳類	部位不明	
1603-3	5862	2 16	銚頭状骨角器	前期	65.8	13.5	7.6	6.75	シカ	角	
1603-6	5865	2 17	銚頭状骨角器	前期	55.7	10.1	6.1	2.56	シカ	角	
1603-8	5867	2 19	銚頭状骨角器	前期	(40.1)	6.3	5.1	(1.54)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-3	5871	3 1	尖頭状骨角器	前期	227.3	18.1	20.4	41.86	シカ	中足骨	左・後面内側
1604-4	5872	3 2	尖頭状骨角器	前期	185.1	18.2	13.5	30.51	シカ	中足骨	右・後面内側
1604-7	5875	3 3	尖頭状骨角器	前期	142.3	20.9	8.8	11.45	シカ	中足骨	左・前面外側
1604-8	5876	4 1	尖頭状骨角器	前期	124.8	10.2	10.7	12.34	シカ	中手/中足骨	前面
1604-13	5881	4 2	尖頭状骨角器	前期	120.9	6.5	3.6	2.83	シカ?	中手/中足骨?	
1604-22	5890	4 3	尖頭状骨角器	前期	(110.3)	7.7	4.2	(4.86)	シカ?	中手/中足骨?	
1604-29	5897	4 4	尖頭状骨角器	前期	(128.5)	12.8	8.8	(12.89)	シカ	中手骨	後面
1604-31	5899	4 5	尖頭状骨角器	前期	(86.9)	9.3	6.7	6.12	シカ?	中手/中足骨?	
1609-1	5916	4 8	尖頭状骨角器	前期	111.2	17.6	6.9	5.81	イノシシ	腓骨	左
1604-1	5869	5 1	尖頭状骨角器	前期	97.2	18.9	17.3	5.00	ノウサギ	脛骨	右
1604-2	5870	5 2	尖頭状骨角器	前期	120.4	18.1	18.3	6.82	ノウサギ	脛骨	左
1604-12	5880	5 3	尖頭状骨角器	前期	79.6	12.9	11.7	1.96	ムササビ	脛骨	右
1604-6	5874	5 4	尖頭状骨角器	前期	79.3	13.7	10.5	2.93	タヌキ	尺骨	右
1604-34	5902	5 5	尖頭状骨角器	前期	71.1	13.7	7.7	2.54	タヌキ	橈骨	左
1604-9	5877	6 1	尖頭状骨角器	前期	(65.7)	10.2	4.1	3.16	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-10	5878	6 2	尖頭状骨角器	前期	55.0	7.3	4.3	1.63	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-11	5879	6 3	尖頭状骨角器	前期	73.5	7.7	3.9	2.66	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-14	5882	6 4	尖頭状骨角器	前期	111.4	8.1	3.9	3.58	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-16	5884	6 5	尖頭状骨角器	前期	(33.1)	6.7	2.8	(0.48)	種不明	部位不明	
1604-18	5886	6 6	尖頭状骨角器	前期	70.0	7.1	4.6	1.61	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-19	5887	6 7	尖頭状骨角器	前期	(84.8)	8.1	3.2	(1.48)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-20	5888	6 8	尖頭状骨角器	前期	(43.9)	8.5	2.6	(0.59)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-23	5891	6 9	尖頭状骨角器	前期	(93.7)	6.2	4.7	3.39	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-24	5892	6 10	尖頭状骨角器	前期	(93.8)	5.6	4.5	(2.61)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-25	5893	6 11	尖頭状骨角器	前期	(92.0)	5.2	3.7	(2.13)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-26	5894	6 12	尖頭状骨角器	前期	(80.4)	6.7	4.6	(2.85)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-27	5895	6 13	尖頭状骨角器	前期	(113.3)	7.5	6.2	(4.37)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-30	5898	6 14	尖頭状骨角器	前期	(91.9)	7.6	4.2	4.07	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-33	5901	6 15	尖頭状骨角器	前期	(64.3)	4.5	3.6	(1.43)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-21	5889	6 19	尖頭状骨角器	前期	(67.4)	(12.7)	(5.5)	(3.99)	シカ?	角?	
1604-32	5900	6 20	尖頭状骨角器	前期	(41.6)	4.5	4.4	(1.32)	種不明	部位不明	
1601-20	5848	7 2	錐形尖頭状骨角器	前期	112.5	24.8	18.2	12.66	シカ	中足骨	r後面外側
1604-15	5883	7 4	錐形尖頭状骨角器	前期	(45.8)	6.3	4.4	(1.28)	陸棲哺乳類	部位不明	
1604-17	5885	7 5	錐形尖頭状骨角器	前期	(86.9)	8.9	4.8	(4.20)	シカ?	中手/中足骨?	
1604-28	5896	7 6	錐形尖頭状骨角器	前期	(70.2)	5.1	4.1	(1.75)	種不明	部位不明	
1604-5	5873	7 7	ヤス先状骨角器	前期	165.5	7.7	7.5	11.19	シカ	中手/中足骨	
1601-19	5847	8 1	針状骨角器	前期	154.9	9.0	7.8	(12.75)	シカ	中足骨	
1601-11	5839	8 2	針状骨角器	前期	(142.8)	8.9	2.4	(2.62)	シカ/イノシシ	肋骨?	
1601-12	5840	8 3	針状骨角器	前期	126.4	11.7	7.3	2.38	シカ/イノシシ	肋骨?	
1620-3	5923	8 4	針状骨角器	前期	(161.4)	7.3	4.1	(4.47)	シカ/イノシシ	肋骨?	
1601-15	5843	8 5	針状骨角器	前期	185.6	12.9	9.2	6.68	シカ	中手/中足骨	
1601-3	5831	8 6	針状骨角器	前期	141.0	7.7	4.2	5.70	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-1	5829	8 7	針状骨角器	前期	133.1	7.2	4.9	4.44	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-18	5846	8 8	針状骨角器	前期	(112.3)	9.3	4.7	(5.52)	シカ	中手/中足骨?	
1601-4	5832	9 1	針状骨角器	前期	(114.2)	6.2	3.7	(2.44)	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-5	5833	9 2	針状骨角器	前期	(116.1)	6.1	4.1	(4.40)	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-6	5834	9 3	針状骨角器	前期	(124.2)	8.5	6.9	(8.85)	シカ	角?	
1601-17	5845	9 4	針状骨角器	前期	(129.1)	5.1	5・0	(4.42)	シカ	中手/中足骨?	
1601-21	5849	9 5	針状骨角器	前期	119.2	6.1	4.0	3.11	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-24	5852	9 6	針状骨角器	前期	91.1	5.6	2.9	1.37	種不明	部位不明	
1601-2	5830	9 7	針状骨角器	前期	99.9	9.1	4.0	4.24	シカ	角?	
1601-16	5844	9 8	針状骨角器	前期	92.6	9.0	3.4	2.71	種不明	部位不明	
1601-7	5835	9 9	針状骨角器	前期	(97.9)	7.1	3.2	(2.42)	トリ?		
1601-22	5850	9 10	針状骨角器	前期	76.5	9.3	3.9	2.82	シカ?	中手/中足骨?	
1601-13	5841	9 11	針状骨角器	前期	(80.2)	7.5	4.2	(2.50)	種不明	部位不明	
1601-14	5842	9 12	針状骨角器	前期	(73.7)	5.2	4.7	(2.32)	種不明	部位不明	
1601-27	5855	10 1	針状骨角器	前期	(49.0)	7.6	4.3	(1.63)	シカ	角	
1601-8	5836	10 2	針状骨角器	前期	(79.4)	8.3	5.7	(4.07)	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-10	5838	10 3	針状骨角器	前期	(90.5)	6.6	3.3	(2.99)	陸棲哺乳類	部位不明	
1601-23	5851	10 7	針状骨角器	前期	76.0	4.5	3.1	1.38	種不明	部位不明	
1601-26	5854	10 8	針状骨角器	前期	76.6	4.1	1.9	0.82	種不明	部位不明	
1601-25	5853	10 9	針状骨角器	前期	84.1	5.2	3.7	1.58	種不明	部位不明	
1601-9	5837	10 18	針状骨角器	前期	(59.2)	4.7	3.1	(1.17)	種不明	部位不明	
1605-1	5903	11 1	へら状骨角器	前期	150.2	34.8	24.3	42.00	ツキノワグマ?	尺骨	右
1605-2	5904	11 2	へら状骨角器	前期	154.8	28.4	12.7	45.84	シカ	角	
1605-3	5905	11 4	へら状骨角器	前期	74.9	18.7	12.5	21.04	シカ	角	
1605-4	5906	11 6	へら状骨角器	前期	(79.7)	16.9	5.6	(6.67)	シカ	大腿骨?	
1608-7	5915	12 1	鹿角穿孔加工品	前期	84.1	11.2	8.4	6.31	シカ	角	
1608-3	5911	12 2	鹿角穿孔加工品	前期	(90.5)	11.1	6.0	(7.84)	シカ	角	
1608-6	5914	12 3	鹿角穿孔加工品	前期	81.7	12.9	14.6	10.76	シカ	角	
1602-1	5856	12 4	鹿角穿孔加工品	前期	(117.4)	18.8	9.6	(17.94)	シカ	角	
1608-1	5909	12 5	鹿角穿孔加工品	前期	88.3	20.4	12.3	12.71	シカ	角	
1608-2	5910	12 6	鹿角穿孔加工品	前期	81.1	15.5	9.3	10.46	シカ	角	
1608-5	5913	12 7	鹿角穿孔加工品	前期	104.1	16.7	13.8	19.69	シカ	角	
1608-4	5912	12 8	鹿角穿孔加工品	前期	58.8	14.0	13.7	11.24	シカ	角	
1606-1	5907	13 7	鯨骨製骨斧	前期	(124.6)	53.4	13.5	(98.67)	クジラ		
1609-2	5917	14 1	装飾品	前期	(79.2)	9.7	4.1	(2.67)	シカ?	角?	
1609-3	5918	14 2	装飾品	前期	125.3	15.9	5.3	6.85	イノシシ?	腓骨?	
1610-1	5919	14 5	装飾品	前期	105.3	21.8	6.6	7.16	シカ	角	
1620-7	5927	14 6	装飾品	前期	135.2	24.4	9.1	19.68	クジラ	椎骨?	
1620-1	5921	15 1	加工痕が残る資料	前期	86.2	16.0	8.8	12.29	シカ	角	
1620-2	5922	15 2	加工痕が残る資料	前期	75.7	17.9	6.9	8.74	シカ	角	
1620-5	5925	15 3	加工痕が残る資料	前期	78.8	9.6	7.9	6.23	シカ	角	
1620-8	5928	15 4	加工痕が残る資料	前期	85.1	19.2	10.7	14.52	シカ	角	
1620-4	5924	15 6	加工痕が残る資料	前期	(54.6)	8.5	7.2	(3.39)	シカ	中手/中足骨?	
1602-4	5859	16 1	ヤス先状骨角器	晩期?	61.2	12.9	10.3	3.78	シカ	角	
1607-1	5908	16 2	鍔形尖頭状骨角器(根ばさみ)	晩期?	52.1	(7.3)	7.5	(2.18)	シカ	角	
1620-6	5926	16 3	猪牙	前期	147.5	19.3	20.2	54.52	イノシシ	下顎犬歯	右

3. 各器種の形態的分析

(1) 分析資料の概要

是川一王寺遺跡出土の骨角器 166 点のうち、器種不明品・破損品の 3 点、中期後葉に属する 15 点及び図 16 に示した 3 点を除いた、145 点を器種別に分析する。釣針形骨角器・銚頭状骨角器・ヤス先状骨角器・尖頭状骨角器・針状骨角器・へら状骨角器・鯨骨製品・装飾品が見られた。器種組成を図 17 に示す。

(2) 器種別の様相

・釣針形骨角器

6 点中、完形品は図 1-1 の 1 点のみで、83% が欠損品である。針部を欠損する割合が高い。針部は内鑿が 1 点、無鑿が 2 点である。軸部の形態は軸部がまっすぐ落ちる資料が 2 点（図 1-1・6）、軸部が肥厚する資料は 3 点（図 1-3・4・5）ある。すべて鹿角製と考えられるため、この形態的な差異が素材による制限とは考えにくい。したがって、軸部の形態と鑿の有無で分類可能である。

サイズについて、図 1-1 は長軸 47.9mm である。一方、軸部が肥厚するタイプは、残存長で図 1-4 が 44.5mm、図 1-5 が 60.8mm であり、図 1-1 のような資料よりも長い形態の可能性はある。フトコロが残存する図 1-1・図 1-2 のフトコロ幅は、それぞれ 26.1mm、28.0mm であり、この 2 点のフトコロ幅は近似する。また、この 2 点と図 1-6 は軸部の断面形態が正円ではなく、楕円に近い形を呈す。一方で、軸部が肥厚するタイプは 1 点がトンネル形であり、もう 1 点は正円に近い断面形を呈す。

・銚頭状骨角器

銚頭状骨角器を渡辺の分類（渡辺 1973）に則って分類すると、図 3-1 のみ頭部と胴部の区別が明確でなく、尾部は二股に分かれ、一王寺型 B 類 a 種である。図 3-2 ～ 17 は、器体が頭部と胴部に分かれるが、胴部と尾部の間には明確な区別を持たない。尾部形態によって細分可能であり、図 3-2 ～ 4 の 3 点は尾部が別れない一王寺型 C 類 a 種に該当する。また、5 ～ 10 の 6 点は尾部が分かれる資料のうち頭部と胴部の区別が左右への張り出しのみの一王寺型 D 類 a 種に該当する。11 ～ 16 の 6 点は頭部と胴部を区別する沈線が背面にまでおよぶ D 類 b 種に該当する。17 ～ 20 の 4 点は頭部と胴部の区別はあるため一王寺型 C 類あるいは D 類であるが、尾部が欠損しており細別は不可能である。

計測可能な資料 13 点を対象に、頭部と胴部以下の割合に注目すると、11・13 がおよそ頭部：胴部以下の割合が 2：8、17 が 5：5 となる。それ以外の 11 点は全て 3：7 から 4：6 付近にまとまる。また、測定可能な資料 11 点を対象に長さ、長さ、長さ、長さ、長さ、長さ、長さ、長さ、長さ、長さ、長さの散布図を図 18 に示す。散布図上では頭

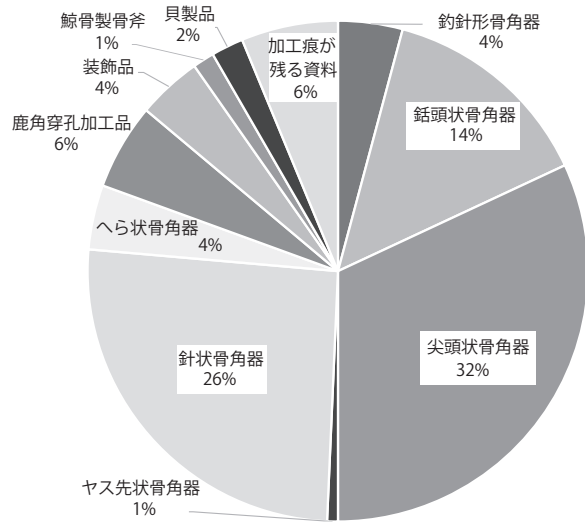


図 17 是川一王寺遺跡における器種組成

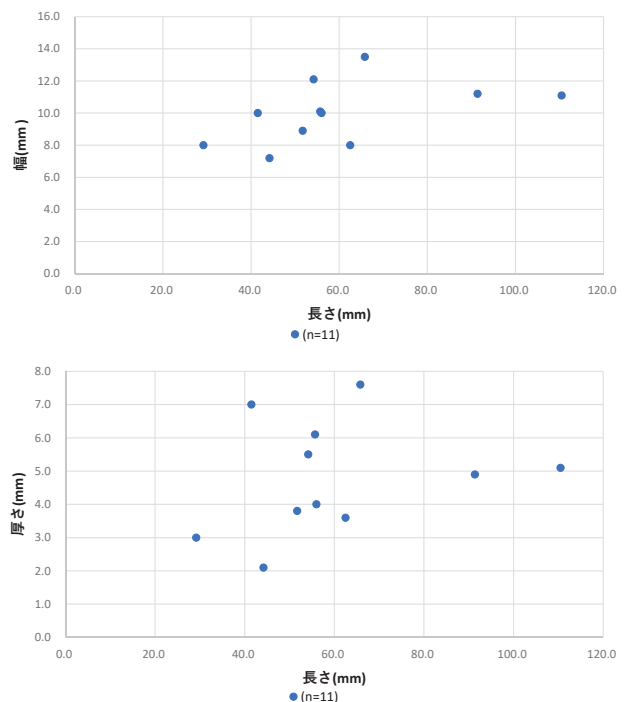


図 18 是川一王寺遺跡銚頭状骨角器法量散布図

著なまとまりや相関関係は見出せない。ソケットの断面形態を判断できる資料 12 点のうち、6 点は緩やかに湾曲し、6 点は逆 V 字状である。尾部方向が破損した資料が 4 点見られる。

・へら状骨角器

6 点のうち 4 点は鹿角製である。図 11-2・3 のように鹿角幹部を大きく使用した資料と、図 11-4・5 のように短冊状に切り出した資料がある。刃部が残存する資料 4 点を対象に刃角を計測し、結果を表 2 に示した。平均値は 57.3°で、尺骨製の 1 は 47.0°、鹿角製の 2 は 83.0°、3 は 71.0°、四肢骨製の 6 は 28.0°であり、4 点中では鹿角製の資料の刃がやや鈍い結果となった。図 11-1・2・3・6 の先端部を肉眼および倍率 20 倍のルーペを用いて観察した結果、全てに縦方向の線状痕が観察できた。特に図 11-3 については外側より海綿質側に多く観察できた。

表 2 是川一王寺遺跡出土へら状骨角器刃角

図番号	資料番号	刃角
図 11-1	1605-1 5903	47.0
図 11-2	1605-2 5904	83.0
図 11-3	1605-3 5905	71.0
図 11-6	1605-4 5906	28.0

・針状骨角器

長さでの検討が難しいため、幅と厚さが測定可能な資料で、時期・素材別にドットを落として散布図を作成し、図 19 に示した。全体を通してみても、素材別で見ても明確なまとまりは得られない。部位不明資料が 17 点、シカ中手・中足骨製資料が 5 点、鹿角製資料が 3 点、肋骨製資料が 3 点とサンプル数が少ないものもあるが、相関係数を算出すると全資料が 0.66、部位不明資料が 0.50、中手・中足骨製資料が 0.61、鹿角製資料が 0.02、肋骨製資料が 0.75 であった。針状骨角器は全体的に正の相関関係が認め

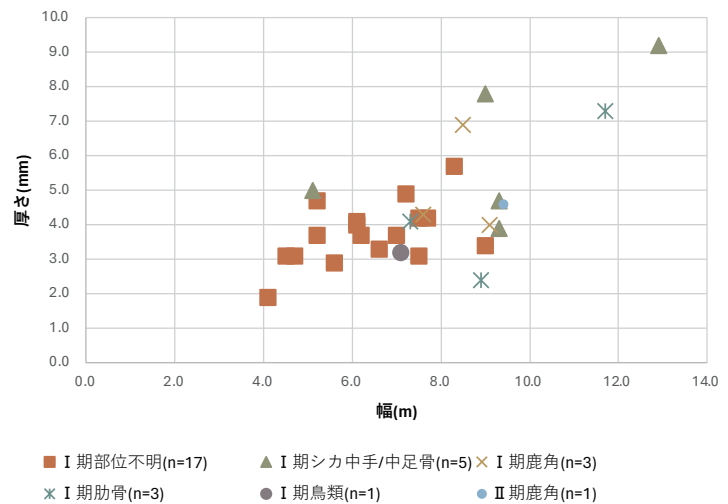


図 19 針状骨角器法量散布図

られ、中手・中足骨製・肋骨製資料には比較的強い正の相関関係が認められる結果となった。

・尖頭状骨角器

47 点観察した。単純な形状が 41 点で 87% を占め、錐形が 6 点で 13% である。つくりが丁寧なものとしてそうでないものに分けられる。前者は 35 点、後者は 4 点である。他は破損など資料の状況から判断を保留したものと、図 5-1 のような小動物骨の遠位端を加工したのみのもものは分類しなかった。以上の資料全体に占める割合は、丁寧なつくりの資料が 74.5%、そうでない資料が 8.5% である。破損について、単純形状の破損点数は 20 点、錐形の破損点数は 3 点である。単純形状の破損資料が単純形状全点に占める割合は 48.8%、錐形の破損資料が錐形全点に占める割合は 42.9% である。錐形については、全て先端部の破損ではなく「持ち手」側の破損である。錐形の先端部を肉眼および倍率 20 倍のルーペを用いて観察した。図 7-3・4 の 2 点は先端部に摩耗が観察できた。図 7-6 は器体全体が光沢を持つほどよく研磨されており、摩耗を観察できなかった。

4. 製作技術の分析

(1) 素材

本遺跡における骨角器素材として利用された動物種は図 20 に示した。まず、大別すると陸棲哺乳類が最大の割合を占める。さらに、陸棲哺乳類の動物種の組成は図 21 に示したが、シカが最多である。また、さらにシカの部位別利用割合を図 22 に示したが、角・中手/中足骨が最も高い。したがって、ここではシカの角・中手/中足骨を代表させて製作工程の復元を試みる。

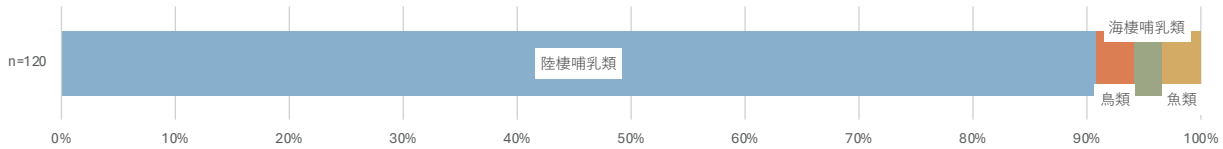


図 20 是川一王寺遺跡における骨角器素材の大別割合

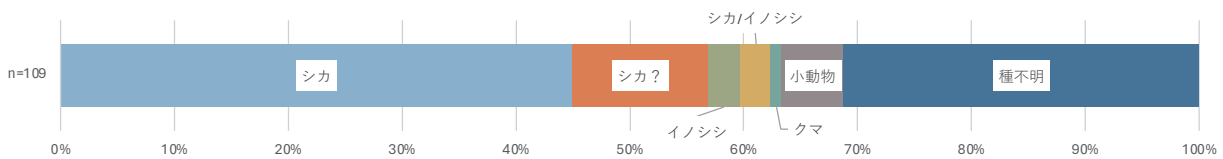


図 21 是川一王寺遺跡における骨角器素材の陸棲哺乳類の細別割合

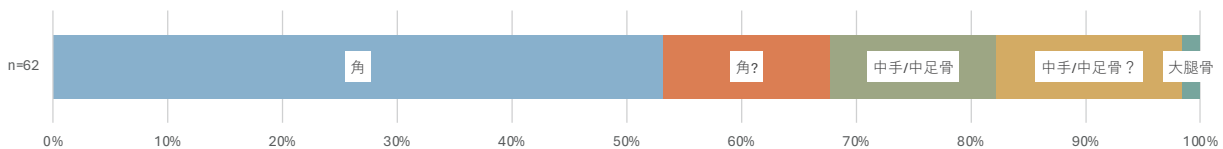


図 22 是川一王寺遺跡における骨角器素材のシカの細別割合

(2) 骨角器の製作工程に関わる用語の定義

骨角器の製作工程を分析するにあたり、いくつかの技術的な用語を定義し、それに基づく観察結果を示す。素材の分割技術には、「擦り切り」と「打ち割り」の 2 種類があり、穿孔に関連する技術としては、尖頭状の道具を回転させて穿孔を行う「回転穿孔」と、刃器類で溝を掘りそのまま貫通させる「擦り切り穿孔」の 2 つを定義する。素材の分割については、素材を長軸と直行する方向に分ける場合を「横割」、長軸に垂直な方向に分ける場合を「縦割」とする。このような分割方法に関する概念図および実際の遺物を図 23 および図 24 に示す。遺物の形態に基づき、擦り切り技術に関わる遺物としては、

石匙やスクレイパーなどの刃器類が考えられる。また、打ち割り技術に関わる遺物としては、敲石などの礫石器が加工工具として想定される。穿孔に関しては、回転穿孔に使用される道具として石錐が、擦り切り穿孔に関しては刃器類がそれぞれ出土している（宮坂 1930、八戸市教委 2018）。

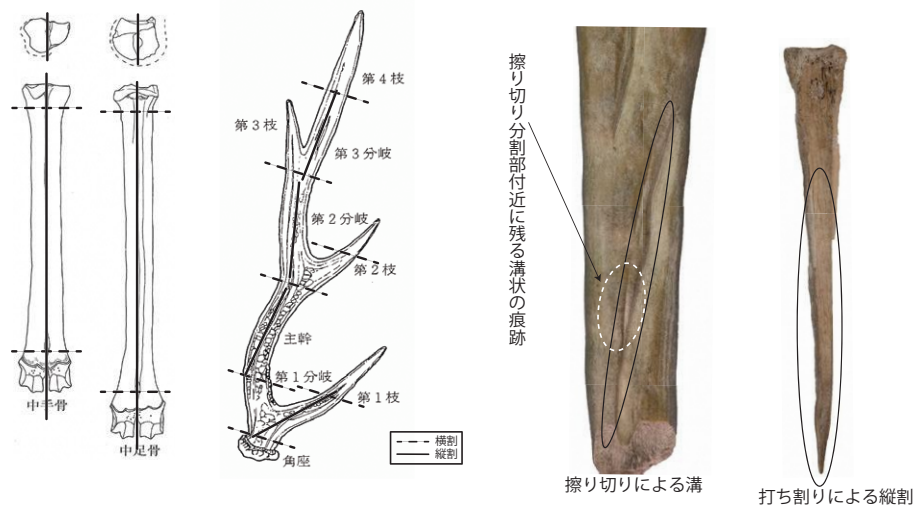


図 23 縦割・横割の概念図と実際の資料

(中手骨および中足骨は松井章 2006 に、鹿角は会田容弘 2007 にそれぞれ筆者が加筆)

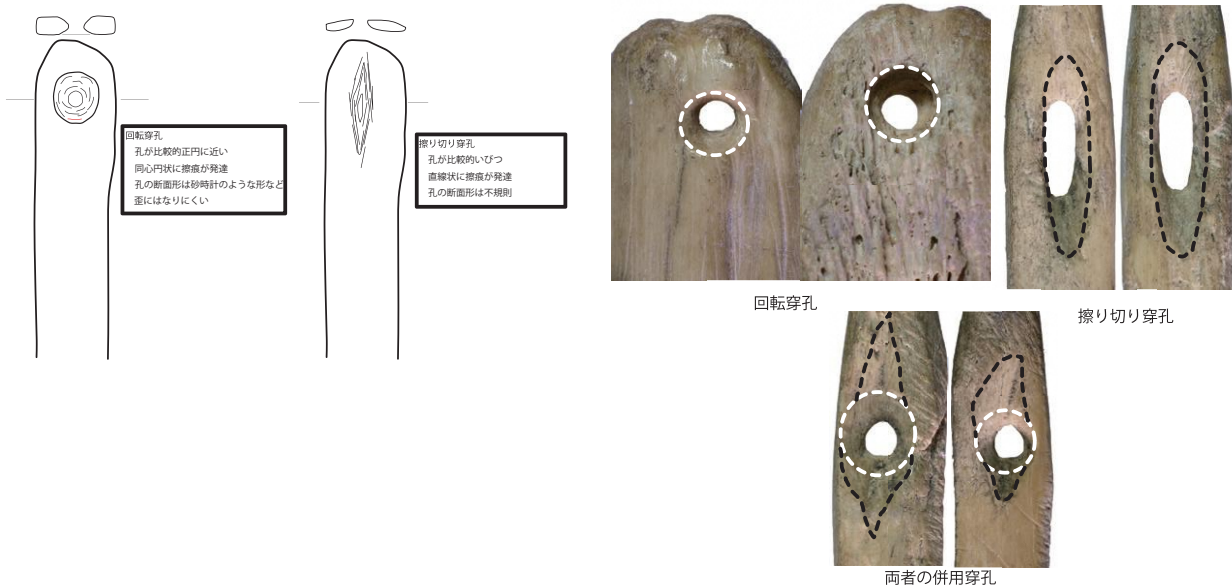


図 24 穿孔技術に関わる名称の概念図と実際の資料

(3) 観察結果から復元される製作工程

まず本遺跡における骨角器の器種別素材を表3に示す。次に、器種ごとに製作技術を検討する。しかし、完成品から横割および縦割の技術を判断することは多くの場合困難である。したがって、製作技術を推定できる器種を選定し、それに基づいて検討を行う。

表3 是川一王寺遺跡における器種別の素材（前期）

加工痕が残る資料				
大別	点数	割合	部位	割合
シカ	6	85.7%	角	71.4%
			中手 / 中足骨?	14.3%
鳥類	1	14.3%	部位不明	14.3%
合計	7		合計	7

釣針形骨角器				
大別	点数	割合	部位	割合
シカ	6	100.0%	角	50.0%
			角?	50.0%
合計	6		合計	6

鉤頭状骨角器				
大別	点数	割合	部位	割合
シカ	9	42.9%	角	33.3%
			中手 / 中足骨?	9.5%
陸棲哺乳類	12	57.1%	部位不明	57.1%
合計	21		合計	21

尖頭状骨角器				
大別	点数	割合	部位	割合
シカ	15	31.9%	角	2.1%
			角?	6.4%
			中手 / 中足骨	14.9%
			中手 / 中足骨?	8.5%
イノシシ	1	2.1%	腓骨	2.1%
鳥類	1	2.1%	部位不明	2.1%
タヌキ	3	6.4%	尺骨	2.1%
			橈骨	2.1%
			脛骨	2.1%
ノウサギ	2	4.3%	脛骨	4.3%
ムササビ	1	2.1%	脛骨	2.1%
陸棲哺乳類	24	51.1%	部位不明	51.1%
合計	47		合計	47

針状骨角器				
大別	点数	割合	部位	割合
シカ	8	21.1%	角	2.6%
			角?	5.3%
			中手 / 中足骨	5.3%
			中手 / 中足骨?	7.9%
シカ / イノシシ	3	7.9%	肋骨	7.9%
鳥類	1	2.6%	部位不明	2.6%
魚類	2	5.3%	エイ尾棘	5.3%
陸棲哺乳類	24	63.2%	部位不明	63.2%
合計	38		合計	38

へら状骨角器				
大別	点数	割合	部位	割合
シカ	5	83.3%	角	66.7%
			大腿骨	16.7%
クマ	1	16.7%	尺骨	16.7%
合計	6		合計	6

・加工痕が残る資料

各遺跡の加工痕が残る資料を確認した結果、角および中手 / 中足骨が最多であることがわかる。鹿角は全て横割もしくは縦割を経た状態である。図 15-1・2・3・4・5 においては、横割が打ち割りで行なわれた後に研磨が施された可能性が高い。打ち割りと判断した理由は、分割部が歪んでいることと、擦り切りに伴う加工痕が確認できないことである。擦り切り加工の際には、分割部周辺に刃が滑った跡として多数の線状痕が残ることが多い。なお 1・2・5 の下端については、加工痕の切り合い関係から破損と考えられる。加えて、4 の上端は加工途中であったと推測される。これらはすべて擦り切りによって縦割される。また、4 については湾曲部に横方向の線状痕が確認できることから、この形を目指

して加工されたと推測される。6は割れ口の歪みから、管状骨を打ち割りで縦割されたものと考えられる。横割の方法については断言できない。7は研磨により横割痕や縦割痕が観察しにくい、形状からして管状骨を打ち割りされたものと考えられる。8～10は鹿角と思われる素材が横割を擦り切りで行ったものである。なお、直径が短いため、若角あるいは先端部とみられる。本遺跡の加工痕が残る資料には、鹿角幹部が出土する一方で、先端部が出土しないという特徴がある。

・釣針形骨角器

全資料のうち、フトコロの作出法を推定できる資料はない。しかし、いずれも板状鹿角から作出された可能性が高い。

・銚頭状骨角器

前期の資料は自然面を残さない場合が多く、分割工程の技術を推定するのは難しい場合が多い。板状鹿角や横割した管状骨から作出された場合、まず擦り切り・研磨によって外形が作出され、次いでソケットが削り出されたと考えられる。

・尖頭状骨角器

素材についてはシカの割合が最も高く、骨角器全体の傾向と一致するものの、他の器種と比べて素材が多岐にわたる。製作技術が判断できる資料で見ると、擦り切りによる加工と考えられる資料は、図3-1・図4-1・2・3・4・5・図6-1・3・9・10・11・12・13・14・19・図7-2・4・5・7があり、打ち割りによる加工と考えられる資料には図3-3・図5-6・8・図7-4・7がある。また、図5-1～5に示された小型獣の脛骨・尺骨製の資料は、骨端部を打ち割り、スパイラル状の尖頭部に研磨が施される。図7-2では基部に横方向と縦方向から回転穿孔がなされる。

・針状骨角器

針状骨角器は細く、丁寧な研磨が施される例が多いため、縦割・横割の方法の推定が難しい。また、同じ理由で素材の同定に至らない資料も多い。この器種に特徴的な事象として、肋骨の使用が挙げられる。横割・縦割の技術を直接示す資料は出土していないものの、図8-2、3、4に見られる肋骨製の資料は、元の形状から考えても横割はともかく、縦割を打ち割りで行ったとは考えにくい。穿孔方法については、擦り切り穿孔と回転穿孔、および擦り切り穿孔と回転穿孔の併用が見られる点の特徴的である。穿痕跡の切り合いから判断すると、擦り切りで溝を作った後に回転穿孔が行われたことが推測される。なお、擦り切りの段階で貫通したか否かは、回転穿孔によって痕跡が上書きされているため断定は不可能であるが、擦り切り穿孔という表現を使用する。再利用については、図8-1において、破損した穿孔部の下に窪みがあり、新たに回転穿孔を行おうとした形跡が見受けられる。また、図10-7では、穿孔の上部にある叉状の部分が古い穿孔の跡であり、穿孔部分が破損した後に再度回転穿孔が行われた可能性がある。

・へら状骨角器

へら状骨角器のうち鹿角製の資料は全て擦り切りで縦割される。大型の資料も擦り切りで横割・縦割される。尺骨製の資料は遠位端を斜めに除去される。図11-6のみ、打ち割った骨片を丁寧に研磨していると考えられる。

・その他の器種

図12に示した鹿角穿孔加工品について、この資料は鹿角製で、丁寧な研磨と錐形の先端部が特徴である。全て、横割りと回転穿孔がなされる。図12-1・2・4・5・6のように、鹿角を擦り切りで縦割した後、回転穿孔が施されたと推定される。装飾品について、図14-5は板状鹿角から製作されたと考えられ、擦り切りで縦割されたと推測される。図14-7・8では、穿孔は回転穿孔で行われている。

5. 考察

(1) 是川一王寺遺跡における骨角器の利用

・捕獲対象と骨角器との関係

本遺跡における動物遺体は、未だ報告が少なく、また定量的な調査も不足している。そのため、大山史前学研究所の調査結果に加え、コラムサンプルを採取し、詳細に報告されている八戸市教委の資料を基に対象魚類について考察する。本報告では、大型および中型哺乳類遺体は目視による回収資料と、サンプル選別による資料の二種に分類される一方、魚骨や貝類はサンプル選別によって得られた資料であり、資料の質に若干の違いがあることが指摘されている（八戸市教委 2018）。さらに、コラムサンプルの水洗選別は A1 および A4 の 2 サンプルのみに限られ、全体のごく一部に留まる。

まず、宮坂光次による調査ではクロダイ、スズキ、ヒラメ、サメが報告されている。次に、八戸市教育委員会の調査によれば、魚類の同定標本数はカツオ類が 133 点で最多、次いでスズキ 60 点、カレイ 55 点である。これらは全て現在の八戸市河口から沖合にかけて漁獲可能な種であるとされる（八戸市教育委員会 前掲）。

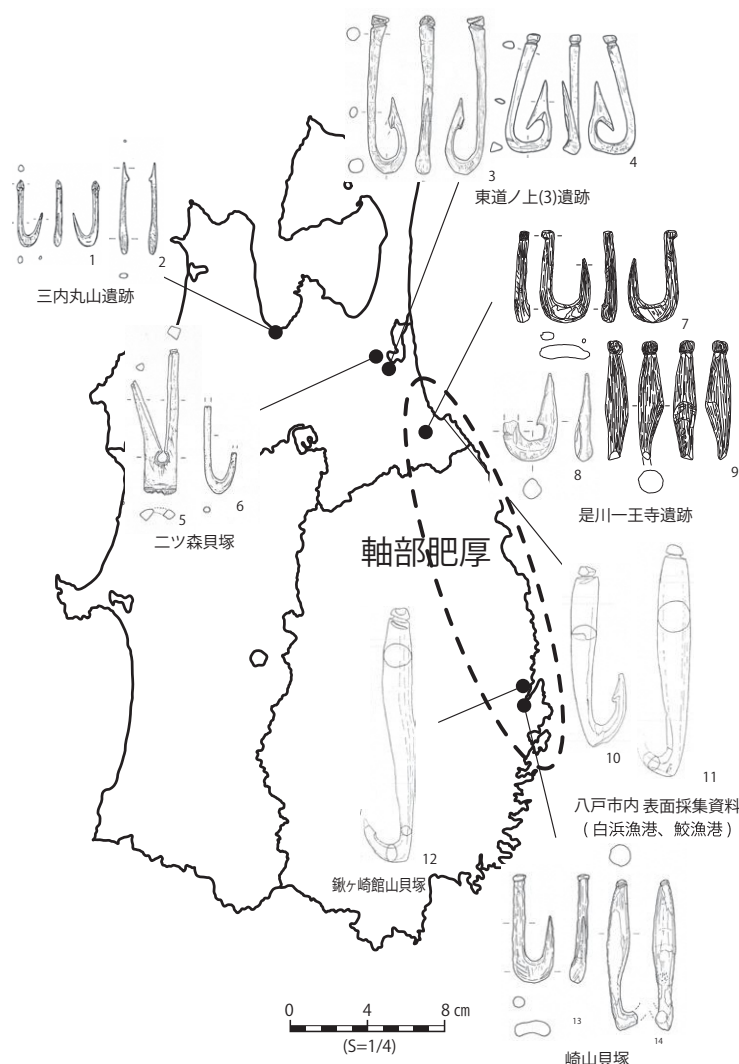
釣針形骨角器は、スズキやクロダイ（内湾）、カレイやヒラメ（内湾から沿岸域）、およびカツオ（外洋）を対象にした釣漁において使い分けられたと考えられる。銚頭状骨角器は出土数の多さおよびカツオの出土量を踏まえると、外洋におけるカツオの刺突漁に用いられた可能性が高い。また、カレイやヒラメを対象とする刺突漁にも利用された可能性がある。さらに、ヤス先状骨角器の出土（1 点）からは、クロダイ、スズキ、カレイ、ヒラメへの刺突漁の可能性も示唆される。

・釣針形骨角器を使った捕獲対象魚種

釣針形骨角器の軸部が肥厚する資料については、図 25 に示されるように、北東北太平洋沿岸域の崎山貝塚などから出土・表採されている。遺跡出土の魚類遺体のうち是川一王寺遺跡・崎山貝塚で出土する魚種のうち両遺跡に共通する種で、かつ主体を占めるのはカツオ・サメ類である。したがってこのタイプの骨角器は沿岸域から外洋域での漁撈に使用されたと考えられ、是川一王寺遺跡ではカツオ、崎山貝塚ではカツオ・ブリ属・マグロ類が対象であったと推定される。

・銚頭状骨角器の形態差の検討

ソケットの断面形状は、滑らかに弧状を呈する資料と逆 V 字状を呈する資料の 2 種類に分類される。この断面形状の違いは、着柄の方法、さらに言えば中柄と



1・2:三内丸山遺跡、3・4:東道ノ上(3)遺跡、5・6:二ツ森貝塚、7~9:是川一王寺遺跡
10:白浜漁港採集資料、11:鮫漁港採集資料、12:鎌ヶ崎館山貝塚、13・14:崎山貝塚

図 25 北東北における釣針形骨角器

して用いられる素材の形状に起因する可能性が高いと考えられる。ただし、中柄として想定される資料の出土事例が存在しないため、現時点では明確な結論を導くことは難しい。

検証材料として、北海道の縄文前期における噴火湾沿岸の銚頭状骨角器の事例を取り上げたい。同地域では湾曲した形状を持つ銚頭状骨角器が多く出土しており、これらが海獣狩猟に使用された可能性が指摘されている（高橋 2008）。この事実に基づき、海獣狩猟に利用される銚頭状骨角器のソケット断面は湾曲する形状を有するとの仮説を立てることができる。しかしながら、本遺跡では海獣類の出土量が非常に少ないことが確認されているため、この仮説が当該遺跡にも適用可能であるかについては慎重に検討する必要がある。したがって、現時点ではソケット断面形状の違いは対象物の種類によるものではなく、中柄の形状やその加工方法に由来する可能性が高いと考えるべきである。

(2) 是川一王寺遺跡における骨角器の製作

・各遺跡の製作技術と遺跡の地域性

分析によって本遺跡における骨角器の製作技術には、擦り切りと打ち割りという異なる分割技術が併存していたことが確認された。このような製作技術が採用された背景を考察するため、周辺遺跡との比較を行いたい。斉藤慶史は、青森湾に面する三内丸山遺跡、小川原湖沿岸に位置する東道ノ上 (3) 遺跡、三陸沿岸の宮古湾に面する崎山貝塚を対象として、これらの遺跡における製作技術の特徴を分析している（斉藤 2016）。

斉藤の研究によれば、三内丸山遺跡および東道ノ上 (3) 遺跡では、擦り切りを多用する製作技術が採用されていたことが指摘されている（斉藤 前掲）。地図上で確認すると、北東北地域には擦り切りを多用する遺跡が点在していることが明らかである。擦り切りは製作に時間を要するものの、偶発的な破損リスクを低減するため、素材の節約や管理的な要素が関与していると考えられる（斉藤 2012・2016）。一方、打ち割りを伴う加工技術は、素材を効率的に活用するという点では不利であり、ある程度の素材の余裕があったと評価されている。こうした地域的な製作技術の違いは、骨角器の素材となる動物骨の獲得状況に起因すると考えられる。本遺跡においては、骨角器の主な素材としてシカが用いられ、その中でもシカの角や中手骨・中足骨が集中的に利用されていたことが確認されている。また、種不明の資料を除いた場合、三内丸山遺跡、東道ノ上 (3) 遺跡、崎山貝塚でも同様の傾向が見られることが、斉藤の研究から明らかになっている（斉藤 前掲）。

・捕獲対象と地域差の関連

先行研究では、三内丸山遺跡における製作技術の背景として、多雪によるシカの個体数の少なさが指摘されている（斉藤 2016）。また、日本海側では縄文時代を通じて、動物遺体に占めるシカやイノシシの割合が低い傾向があることも報告されている（櫻庭 2024）。藤原（2018）の研究では、Tピットの分布に積雪量という自然条件を加えて分析した結果、太平洋側と比較して、日本海側や北半島など積雪量が多い地域ではTピットの数が少ないことが明らかにされている（藤原 2018）。これらの指摘を骨角器の製作技術と関連付けて考察すると、多雪地域ではシカの個体数が少ないと推測されるため、擦り切りを多用する遺跡が立地していることが分かる。一方、太平洋側のようにシカの獲得が可能な地域では、打ち割りも併用する製作技術を持つ遺跡が多いことが確認される。このことから、三内丸山遺跡をはじめとする日本海側の遺跡と、太平洋側に立地する遺跡の骨角器製作技術の違いは、主にシカの生息環境という自然条件に起因すると解釈できる。

以上を踏まえると、北東北の地域は、自然的要因と骨角器製作技術の特徴を組み合わせることで、日本海側～青森湾地域と太平洋側地域の2つに区分することが可能であると考えられる。

・小型哺乳類の皮革利用の可能性

本遺跡において、尖頭状骨角器の素材として小型獣が用いられていたことは表2に示されている。また、動物遺体にも一定数の小型獣が含まれている（八戸市教委 2018）。さらに、骨角器の器種構成では針状骨角器が占める割合が高い。このように、骨角器の素材として小型獣が使用され、針状骨角器の割合が高い傾向は、三内丸山遺跡でも確認されている（青森県教育委員会 2018）。小型獣は大型獣と比較して1匹あたりの肉量が少なく、食肉資源としての効率は低い。そのため、毛皮利用を含めた検討の必要性が指摘されている（齊藤 2023）。

これらの指摘を踏まえ、筆者は以下の仮説を提起する。本遺跡や三内丸山遺跡、是川一王寺遺跡など、針状骨角器の割合が高い遺跡では、小型獣の骨を用いて皮革製品を製作していた可能性がある。これらの遺跡で出土するノウサギ、ムササビ、キツネ、タヌキといった小型獣は、現代でも毛皮利用が一般的であり、先史時代においても毛皮が利用されていた可能性は十分に考えられる。もし針状骨角器が皮革製品の製作に使用されていたとすれば、骨角器の素材として小型獣が多用される理由が説明できる。また、毛皮生産を目的とした狩猟が行われ、その後、遺跡内で皮革製品の製作が行われていたため、針状骨角器が多用された可能性がある。さらに、毛皮を剥ぎ取った後の骨を加工し、尖頭状骨角器として利用した結果、骨角器素材に小型獣が多く用いられた可能性も考えられる。しかしながら、現段階では毛皮そのものの出土がなく、これらの仮説を直接的に検証することは困難である。また、針状骨角器の具体的な機能や用途には未解明な部分が多いため、現時点での考察は予測的な内容にとどまる。今後は、同様の傾向を持つ遺跡の調査データの蓄積や、針状骨角器の微細観察による使用痕研究の実施、さらに針状骨角器の先端部からの脂質の検出などを通じて、これらの仮説をより具体的に検証することが求められる。

(3) 是川一王寺遺跡における骨角器の製作と使用の変化

ここまで、是川一王寺遺跡における骨角器を分析し考察を行ってきた。本遺跡については、まず前期から中期にかけての資料数の変化が問題として挙げられる。中期には榎林式期の竪穴建物跡覆土からわずか15点のみが出土しており、これらは貝層からではなく、炭化種子と同じ層から検出されている。また、骨角器そのものに被熱の痕跡が見られる（八戸市教委 2018）。したがって、中期の骨角器は、前期の貝層から出土した資料とは異なる廃棄方法が取られていた可能性がある。そもそも中期には貝層が形成されていないものの、集落自体は存続しており、竪穴建物跡からの出土例からも、骨角器の使用が中期に断絶したとは考えにくい。むしろ、単純に残存していないと解釈するのが妥当であろう。また、中期には本遺跡において集落が分散していたと指摘されており（青森県史編さん考古部会 2017）、この集落の分散が貝塚が形成されなかった一因とも考えられる。

製作技術に関しては、筆者の分析により、前期には擦り切りと打ち割りの技術が併用されていたと推定される。一方、中期の資料では擦り切りによる横割り加工が施されたシカの角が目立つ（図15-8～10）。このことから、中期には製作技術に変化があった可能性が考えられるが、中期の資料数があまりにも少ないため、現段階では変化を推定するには不十分である。今後の資料の増加により、さらなる議論が可能となるであろう。

本遺跡の特徴として、釣針形骨角器と鋸頭状骨角器が挙げられる。鋸頭状骨角器は、過去に渡辺誠によって「一王寺型」が設定されるほど多く出土しており、尾部の分岐の有無など、さまざまな種類が確認されている（図3）。また、釣針形骨角器についても、無鏃・内鏃の資料に加え、軸部が肥厚する資料が出土している。これらは、本遺跡で多く出土するカツオなどの外洋性回遊魚を対象としたものと考えられる。この傾向は、縄文海進によって前期に本遺跡周辺に形成された古新井田湾（辻ら

2015) を経て、沖合への漁撈活動が行いやすい環境であったためと推測される。さらに、銚頭状骨角器は北海道や北東北の他遺跡と類似する形態を示しており、渡辺誠による寒流域で発達したとの評価(渡辺 1973) を、本稿の新資料によって追認する結果となった。また、銚頭状骨角器と軸部が肥厚する釣針形骨角器には、崎山貝塚との共通点が認められる。両遺跡は三陸沿岸北部、海岸段丘が発達する地域に位置しており、自然環境の類似性から、類似した漁撈形態を持っていたと考えられる。

以上の分析から、本遺跡における骨角器の特徴として、北海道と共通する寒流域の銚頭状骨角器と、本遺跡以南の地域で使用された釣針形骨角器が併用されていた様子が明らかとなった。これらの結果は、八戸地域の当時の自然環境と漁撈活動の特徴を考察する上で重要な知見を提供するものである。

おわりに

ここまで泉山コレクションの骨角器を報告し、その製作技術や利用の様相を考察した。不明であった骨角器の製作技術や、毛皮加工と骨角器の関係性といった新たな視点をいくつか提示することができた。一方で、是川一王寺遺跡から 30km 北の小川原湖沿岸に位置する東道ノ上 (3) 遺跡は比較的太平洋に近い場所に位置しながらも擦り切りを多用する。この点は自然的要因では説明できず、素材の移動など社会的な理由を考慮する必要がある。今後、近接する二ツ森貝塚などの遺跡との比較を通じて、さらに検討していきたい。

謝辞

本稿は 2024 年度に弘前大学人文社会科学研究所に提出した修士論文「円筒土器文化圏における骨角器の製作と利用」のうち是川一王寺遺跡の骨角器に関わる部分を抜粋し、再構成したものである。骨角器の部位同定には植月学・櫻庭陸央(帝京大学文化財研究所)の両氏のご助力を賜った。また資料借用に際し、便宜を図っていただいた以下の諸機関・諸氏にも深く感謝する(敬称略)。小久保拓也、市川健夫、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、八戸市博物館

註

- 1) 泉山コレクション骨角器の実測図について、番号の横の()内に ID・資料番号を記した。各発掘調査報告書中転載の場合は、頭に「報」と記し、西暦の下二桁を掲載図番号とともに付した。宮坂(1930)転載の実測図には宮 30 と付した。また、大山(1939)からの転載には大 39、大給(1935)からの転載には大 35、長谷部(1926)からの転載には長 26 と付した。

引用文献

- 青森県教育委員会 2018a『三内丸山遺跡 44 総括報告書(第1分冊)』青森県埋蔵文化財調査報告書第588集
- 青森県教育委員会 2018b『三内丸山遺跡 44 総括報告書(第2分冊)』青森県埋蔵文化財調査報告書第589集
- 青森県史編さん考古部会 2017『青森県史 資料編 考古編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期』pp.342-345・522-525
- 大山柏 1939「史前人工遺物分類 第二綱 骨角器」『史前学雑誌』第11巻第4・5・6号代冊 史前學會
- 大給尹 1935「史前漁撈関係資料としてのエヒ類(Batoidei)に就いて」
『史前学雑誌』第7巻第6号史前學會 pp.311-321
- 斉藤慶史 2012「貝塚出土獣骨からみた円筒土器文化圏内における狩猟活動の地域性」『博古研究』
第22巻第2号 博古研究会 pp.13-23
- 斉藤慶史 2013「第6鉄塔地区から出土した骨角器の製作残滓と出土獣骨の部位別組成—骨角器素材における部位の
選択制に関する検討」『特別史跡三内丸山遺跡年報』第16巻 三内丸山遺跡センター pp.29-39
- 斉藤慶史 2016「津軽海峡圏の骨角器—円筒土器文化期の骨角器製作技術基盤を中心に—」
『日本考古学協会 2016 弘前大会第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』
日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会 pp.153-166
- 斉藤慶史 2023「東北北部の縄文集落に見る生業・交流の特質」『日本考古学協会 2023 年度宮城大会
「災害と境界の考古学」研究発表資料集』日本考古学協会 2023 年度宮城大会実行委員会 pp.131-140
- 櫻庭陸央 2024「東北地方日本海側における縄文時代の動物資源利用」
『動物考古学』第41号 日本動物考古学会 pp.39-49
- 七戸町教育委員会 2007『二ツ森貝塚—範囲確認調査報告書—』七戸町埋蔵文化財調査報告書第71集
- 市立函館博物館 1958『サイベ沢遺跡—函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書—』
- 高橋健 2007「北海道沿岸の海獣銜猟」『縄文時代の考古学5 なりわい—食料生産の技術—』同成社 pp.113-130
- 高橋健 2008『日本列島における銜猟の考古学的研究』北海道出版企画センター
- 辻誠一郎・一木絵里・松本優衣・安室一・市川健夫・宇部則保・村木淳・杉山陽亮・西村広経 2015
「八戸地域の縄文時代草創期～中期の環境変動と集落生態系」『研究紀要』第4号
八戸市埋蔵文化財センター—是川縄文館 pp.5-36
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告5 骨角器(1)』
鳥取県埋蔵文化財センター調査報告第32集
- 長谷部言人 1926「燕形銜頭」『人類学雑誌』第41巻第3号 一般社団法人日本人類学会 pp.141-145
- 八戸市教育委員会 2018『史跡是川石器時代遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第164集
- 八戸市博物館 1988『図解 青森県の貝塚』
- 福井淳一 2019「北海道出土の骨角製針について」『郵政考古紀要』第71号 大阪郵政考古学会 pp.54-71
- 藤原秀樹 2018「北海道・北東北の縄文時代前半期の陥し穴」『北海道考古学』第54号 北海道考古学会 pp.1-20
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『福島町 館崎遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第333集
- 宮古市教育委員会 2009『崎山貝塚 第Ⅳ期内容確認調査概報(骨角器篇)』宮古市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 宮城県教育委員会 1986『田柄貝塚Ⅲ 骨角牙貝製品・自然遺物』宮城県文化財調査報告書第111集
- 宮坂光次 1930「青森県是川村一王寺史前時代遺跡発掘調査報告」『史前学雑誌』第2巻第6号 史前學會 pp.337-356
- 渡辺誠 1973『考古学選書7 縄文時代の漁業』雄山閣

一王寺遺跡の貝類と貝製品

The shellfish and the shell artifacts from Ichioji Site

澁谷 侑奈

SHIBUTANI Yuna

1. はじめに

令和7年度是川縄文館特別展「貝へのあこがれ」開催にあたって、一王寺遺跡^{いちおうじ}から出土した貝類について、2014（平成26）年の調査で取り上げた埋土から検出した資料の整理を行った。2014年の調査では、大山史前学研究所による旧調査坑（SX1）を再検出した。埋土には多量の土器や石器のほか、貝や動物遺存体が含まれていたため、全量を取り上げている。また、2016（平成28）年の調査ではSX1の北側に調査区を設定し、コラムサンプルを採取している。このコラムサンプルについては、水洗選別後、貝類を含む動物遺存体について報告している（横山2018）。しかし、SX1の埋土から検出された貝類については未報告であった。大山史前学研究所による調査時に出土した貝種は、宮坂(1930)で報告されているが、遺物自体は残っていないため、本論ではSX1埋土から検出された貝類について整理し、報告内容との比較を行う。また、SX1埋土の貝類の整理中に発見した貝製品と、泉山コレクションの貝製品についても報告し、一王寺遺跡の貝利用の一端を紹介したい。

2. 一王寺遺跡の概要

一王寺遺跡は、八戸市是川に所在し、堀田遺跡^{ほつた}・中居遺跡^{なかい}とともに是川石器時代遺跡として国史跡に指定されている。標高20mの低位段丘から標高100mの丘陵性段丘に立地し、遺跡の北端・南端には新井田川に合流する旧沢地形（長田沢・寺ノ沢）があり、当時は三方を河川と沢に挟まれた舌状台地に立地していたと考えられる。遺跡は、主に縄文時代前期から後期の遺物・遺構が検出されており、前期のものと考えられる貝塚も見つかっている。

1926（大正15）年に東北帝国大学の長谷部言人・山内清男によって4カ所（A・A'・B・C地点）を発掘調査されているが、調査地点は不明である。このうちC地点で貝塚が発見された。また、この調査で円筒下層式土器と円筒上層式土器がはじめて層位的に確認された。

1929（昭和4）年の大山史前学研究所による発掘調査では、長谷部・山内が調査したB・C地点近くにA・B地点の2地点を設定し調査が行われた。長谷部・山内の調査地点C地点の西側にあたるB地点では、完形土器・石器・獣魚骨・貝殻等が多量に検出された。自然遺物として出土した動物遺存体・貝類が報告され、人工遺物として土器や骨角器が報告されている（宮坂1930）。同年に泉山兄弟も大山史前学研究所の調査地点近くを調査しており、骨角器・動物骨等が出土している。骨角器などは泉山コレクションとして残されている。

八戸市では、1994（平成6）年から2010（平成22）年にかけて遺跡の範囲確認のための調査を継続的に行ってきた。調査によって遺跡の土地利用状況が明らかになっている（宇部・横山2012）。2014（平成26）年からは、昭和32年の史跡指定地を中心として、遺跡の基本的な情報を把握するための内容確認調査を実施している。

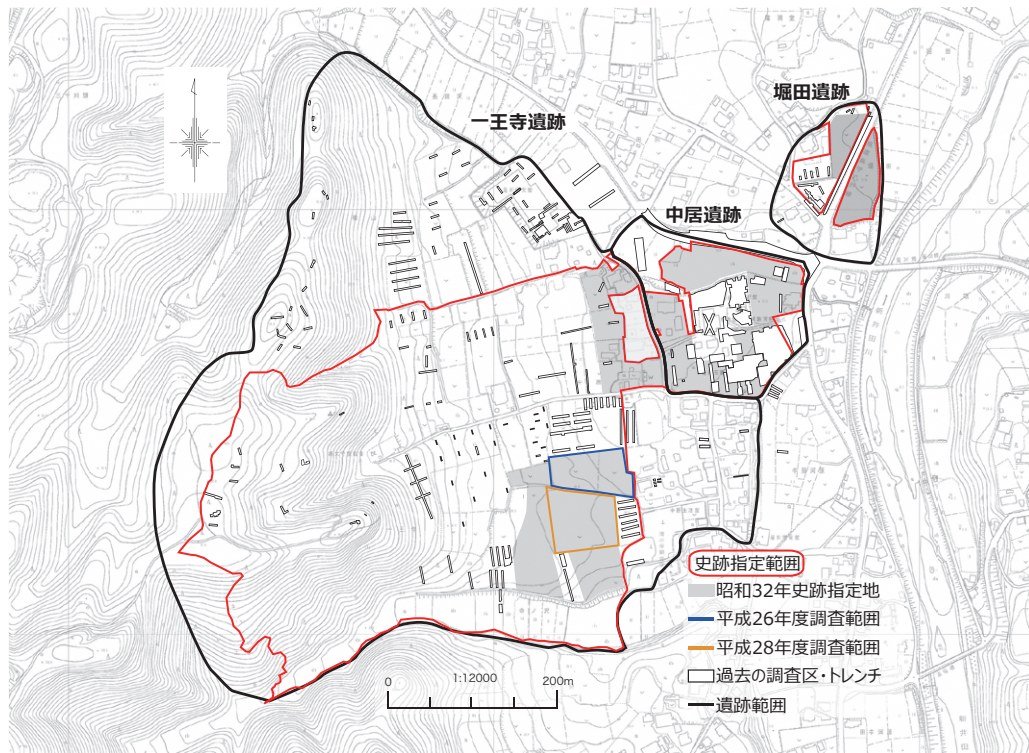
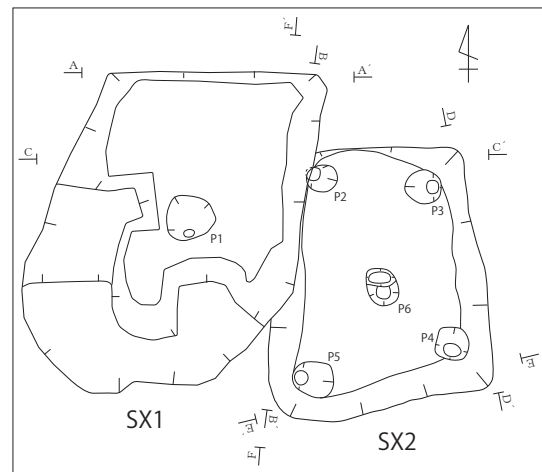


図1 史跡是川石器時代遺跡全体図

3. 2014（平成26）年の調査

2014（平成26）年の内容確認調査では、①昭和32年史跡指定地における遺構分布と堆積状況の確認、②大正～昭和年間に調査された貝塚の場所の特定及び内容の確認の2つを目的として調査を行った。過去の貝塚調査地点は正確な図面がないため不明であるが、長谷部らの報告や泉山氏の図面から調査区を設定した。調査区は北東に傾斜する標高22～27mの斜面上に立地する。16箇所のトレンチを調査したところ、縄文時代前期～中期の縄文土器や石器が大量に出土し、円筒土器文化期に形成された遺物包含層が検出された。172トレンチ東側では、不整形の掘り込みを2基（SX1・SX2）検出した（図2）。旧調査坑の可能性が高いとし、精査を行ったところ、SX1の埋土からは多量の貝殻・獣骨が検出されたため、全量を回収した。SX1は東西2.6m×南北3.5m・深さ1.6mを測り、平面形は不整隅丸長方形を示す。SX2は東西2.5m×南北3.0m・深さ1.5mを測り、平面形は不整隅丸長方形を示す。SX1壁面の観察から、上位に褐色土層と黒色土層の互層（1～9層）、下位に混貝土層（10～15層）を確認した。



SX1 北壁

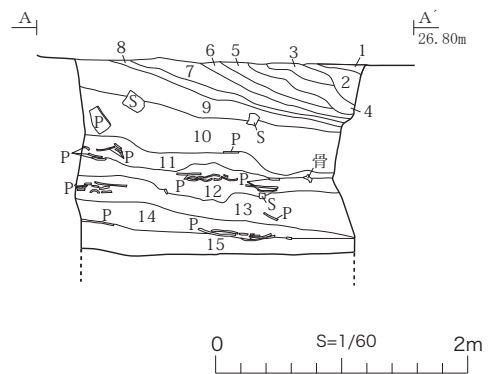


図2 SX1・SX2 平面図及びSX1 北壁セクション図

1～9層には縄文時代中期の円筒上層式土器、10～15層には前期の円筒下層b・c式土器が含まれていることがわかった。また、SX1からはボタンや鉛筆など近代の遺物も出土している。過去の調査記録及び図面から、SX1が1929（昭和4）年の大山史前学研究所による調査地点、SX2が1926（大正15）年の長谷部言人・山内清男による調査地点である可能性が高いと考えられる。下位の混貝土層は大正・昭和年間に調査された貝塚の一部であると特定した。取り上げたSX1埋土は、5mmメッシュの篩による選別作業を行い、獣骨・魚骨・貝類・ウニなどが検出されている（横山2017）。

4. 一王寺遺跡の貝

SX1埋土から検出された貝類の組成を明らかにするため、貝類の分類・個体数の算出を行った。二枚貝については、殻頂部が残存する資料を抽出し、左殻と右殻のうち多い方を個体数とした。結果について、2016（平成28）年のコラムサンプルの分析結果と宮坂（1930）で報告された貝類との比較を行う。なお、宮坂（1930）の報告では、各貝種の数量は報告されていない。

表1はSX1埋土から出土した貝類である。イガイやアサリ、コタマガイ、イシガイ、クボガイなどが多い結果となった。表2は1930（昭和5）年に報告された貝類である。表1・2双方で共通する貝種は網掛けで示している。数量が不明なため、どの貝種が多く含まれていたのかはわからないが、イガイやアサリ、マガキ、イシガイ、シジミなど多くの貝種が共通している。しかし、コタマガイやチヂミボラ・エゾチヂミボラは表2に含まれていない。遺物が残っていないため当時の分類状況はわからないが、他の貝種と混同して分類されたことが考えられる。チヂミボラ・エゾチヂミボラはヒメエゾボラと形が似ており混同の可能性が考えられる。しかし、コタマガイはアサリやカガミガイといった他の二枚貝とは形や大きさが異なり、埋土に含まれる貝殻も形が残っているものが多いため、他の貝種との混同については疑問が残る。

2016（平成28）年のコラムサンプルは、調査区のA1・A4グリッドに30cm×30cmのコラムサンプルを設定し採取を行った。A1コラムは厚さ5cmを1単位として定量的に採取し、A4コラムはSX1北壁1～15層に沿って採取した。サンプルは土のう袋362袋、全重量2,100kgであった。サンプルは水洗選別を行い、貝類は5mm、2.5mmメッシュの全量、1mmメッシュの100cc抽出資料を分析対象として報告している（横山2018）。コラムサンプルから検出された貝類は、表3に示すようにほぼイガイが占めている。タマキビ・ユキノカサガイ科は殻高1cm未満であり、食用とはならないとされており、SX1埋土のタマキビ・カサガイも殻高1cm未満が多いため、この点は共通している。他の貝種が検出されていない点は気になるが、イガイはSX1埋土にも最も多く含まれる貝種であり、コラムサンプルの採取位置がイガイを多く含む地点であった可能性がある。

今回検出された貝類について、岩礁に生息するイガイ・クボガイ・チヂミボラや、内湾に生息するコタマガイ・アサリ・マガキなど海水産の貝類が多いことがわかる。そのほか、汽水域に生息するヤマトシジミ、淡水産のイシガイがある。遺跡の近くには、縄文海進期に古新井田湾が形成されていた。縄文時代前期初頭にはじまった海退と、中振軽石の降下によって、海進期に形成された他の内湾は急速に埋め立てられていったが、火山の影響が少なかった古新井田湾は残っていたと考えられている（辻ほか2018）。そのため、現在よりも海岸線が近く、海の資源が利用しやすい状況であった。それに加えて、河川や沼などでの採集活動も行われていたと考えられる。

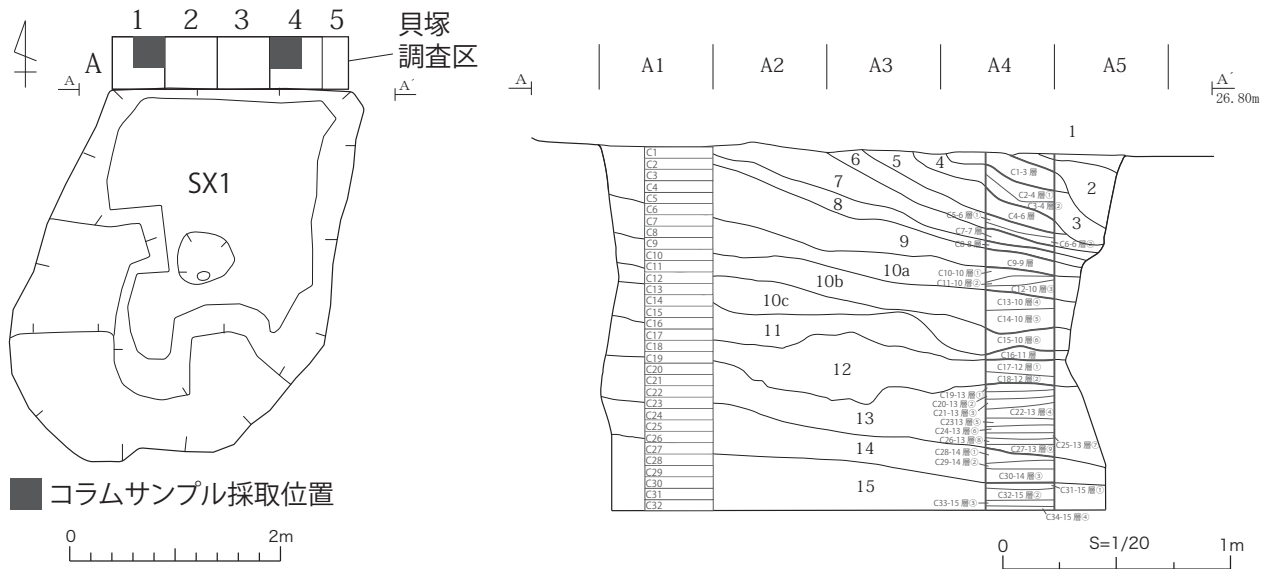


図3 貝塚調査区及びコラムサンプル採取位置

表1 SX1 埋土から検出された貝類

貝種	数量			生息域
	R	L	個体数	
イガイ	183	250	250	岩礁
アサリ	158	171	171	干潟～内湾砂底
イシガイ	102	142	142	淡水
コタマガイ	140	140	140	内湾砂底
ヤマトシジミ	38	54	54	汽水
ムラサキインコ	7	14	14	岩礁
ウバガイ	10	5	10	砂底
マガキ	4	8	8	内湾砂底
クボガイ		139	139	岩礁
チヂミボラ		74	74	岩礁
エゾチヂミボラ		24	24	岩礁
ヒメエゾボラ		1	1	岩礁
レイシガイ		13	13	岩礁
ベンケイガイ	1		1	砂底
タマキガイ科		2	2	砂底
ツメタガイ		1	1	岩礁
タマキビ		96	96	岩礁
カサガイ		6	6	岩礁

表2 宮坂（1930）で報告された貝類

貝種	生息域
イガイ	岩礁
マガキ	内湾砂底
アサリ	干潟～内湾砂底
シジミ	汽水
イシガイ	淡水
ヒメエゾボラ	岩礁
クボガイ	岩礁
カガミガイ	干潟～内湾砂底
ホタテガイ	砂底

※網かけ（黄色）は、表1・2で共通する貝種であることを示す。

表3 2016年調査コラムサンプルの貝類

貝種	数量			生息域
	R	L	個体数	
イガイ	23	30	30	岩礁
カワシンジュガイ		1	1	淡水
タマキビ		1	1	岩礁
ユキノカサガイ科		1	1	岩礁



図4 SX1 埋土から検出された貝類

5. 貝製品

一王寺遺跡から出土した貝製品 2 点について報告する。

(1) 貝輪 (図 5-1、図 6)

泉山コレクションには一王寺遺跡出土の貝輪が 1 点含まれている。貝輪はベンケイガイ製であり、殻長 84mm、殻高 76mm で、中央の孔の内径は長径 49mm×短径 44mm である。孔の周縁や貝殻表面は研磨されており、未製品と考えられる。孔の右下部に大きく剥離痕があり、これは貝殻内側からの敲打によって生じた剥離と考えられる。

貝輪の製作方法は、最初に貝殻の内面を敲打して穿孔し、その後、貝殻外面から孔の周縁を敲打して孔を拡張する方法が提唱されている。外面からの敲打方法には、砂の上での敲打 (忍澤 2011) や、両極打撃 (阿部 2007) など複数の方法が考案されているが、内面→外面という製作工程は共通している。しかし本資料は、外面に剥離があることや、孔の断面に複数の剥離痕があることから、孔の拡張段階においても内面からの敲打が行われていた可能性がある。そこで、内面からの敲打で実際に外面に剥離が生じるのか、実験を行った。

実験では、内面からの一方向の打撃と、外面に台石を置いて内面から打撃する両極打撃の 2 つの方法で貝輪を製作した (図 7)。2 点を比較すると、両極打撃を行ったものには貝殻外面に剥離が生じやすいことが分かった。一王寺遺跡の貝輪はこの 1 点のみであるため、製作工程を復元することは難しいが、内面からの敲打 (両極打撃) による製作が行われていた可能性が考えられる。

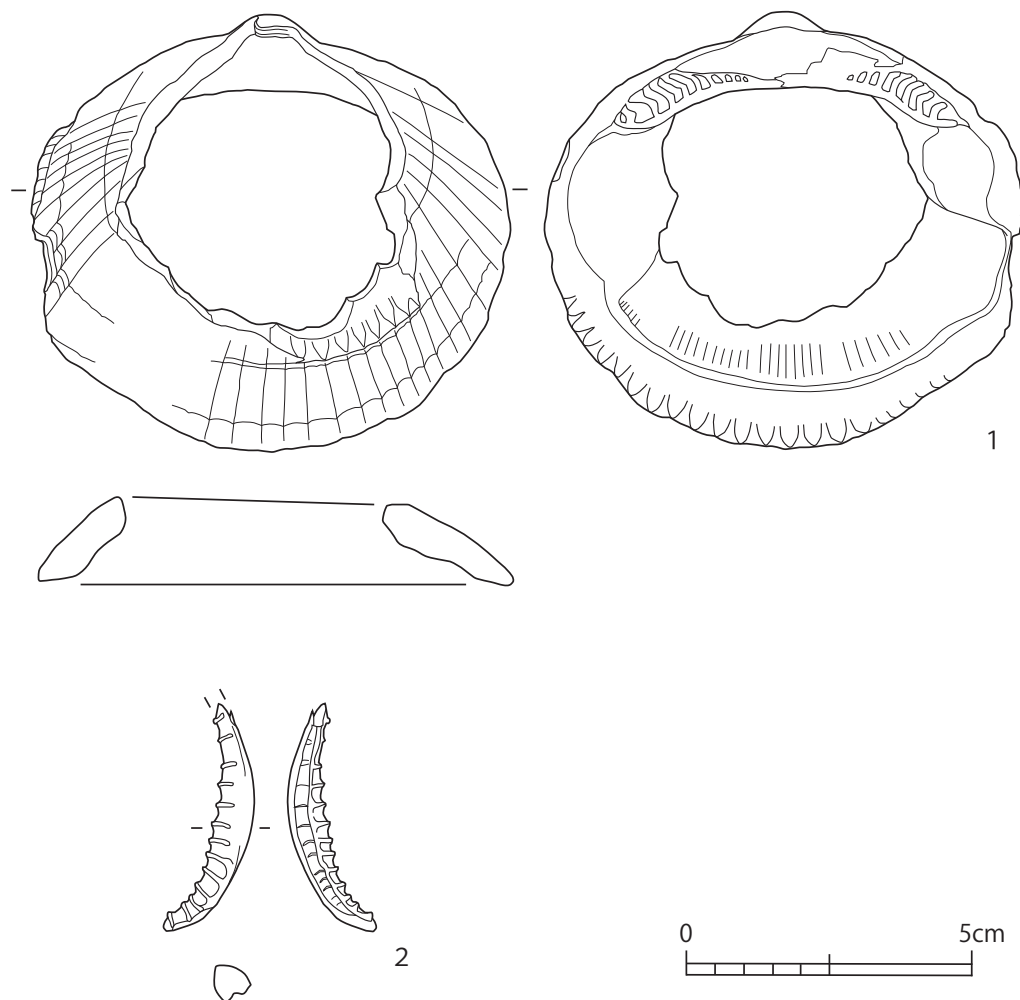


図 5 一王寺遺跡出土貝製品



図6 ベンケイガイ製貝輪



図7 貝殻内面から打撃を加えたベンケイガイ

貝輪の素材であるベンケイガイは、北海道南部以南の水深 20 ～ 50 m に生息している貝である。水深が深く、生きた貝を採集することは難しいため、縄文時代の人びとは海岸に打ち上げられた貝を採集していたと考えられている。現在、日本の各地でベンケイガイが打ち上がる海岸がみつまっている。青森県内でも、福田氏や忍澤氏の調査によって、津軽半島の七里長浜、三沢市の淋代などで打ち上げが確認されている（福田 1995・忍澤 2011）。八戸市でも打ち上げが報告されており、筆者が八戸市の海岸で調査を行った際は、北須賀海岸でベンケイガイの打ち上げを確認した。

八戸市内で一王寺遺跡のほかに貝輪が出土している遺跡は、管見では熊ノ林遺跡と松館遺跡の 2 遺跡で、フネガイ科製貝輪が出土している。ベンケイガイ製貝輪については、三沢市野口貝塚（早期末～前期）や東北町東道ノ上 (3) 遺跡（前期）などで出土している。未製品が出土していることや、ベンケイガイの打ち上げ地に近い立地であることから、海岸で素材を採集し貝輪の製作を行っていた遺跡と考えられている。一王寺遺跡について見ると、前項で報告した SX1 埋土からはベンケイガイを含むタマキガイ科が検出されている（表 1）。さらに、泉山コレクションには、貝輪のほかに一王寺遺跡

出土とされるベンケイガイの破片がある。貝輪製作に関わる破片かは検討が必要であるが、ベンケイガイを集落に搬入していたことがうかがえる資料である。今回報告した貝輪も未製品であることから、一王寺遺跡の人びとは海岸で素材を採集し、貝輪製作を行っていた可能性がある。

(2) カズラガイ加工品 (図5-2、図8)

カズラガイの殻口部を切り取った製品である。SX1 埋土から出土した貝類を整理している際に発見した。長さは41mmで、全体に研磨は見られない。カズラガイ加工品は、関東～北海道の貝塚で出土が確認されている製品で、タカラガイの殻口部を加工した製品と形が似ているため、タカラガイの代用品である可能性が指摘されている(忍澤 2000)。

縄文時代には、タカラガイの殻口部を切り取った製品が各地の貝塚などで出土している。タカラガイの殻口部は刻みをもつという特徴があり、それを生かした装飾品であると考えられる。しかし、殻口部をさらに半分に割った製品も見つかっている。この製品は紐を通すことができないため、垂飾のような装飾品としては使用できないだろう。そのため用途は不明だが、殻口部の刻みを意識して作られたものと考えられる。カズラガイの殻口部も、タカラガイに非常によく似た刻みを持っており(図9)、殻口部のみを切り取ると、タカラガイの殻口部加工品とそっくりの製品を作ることができる。千葉県さいひろ西広貝塚(後期)では、タカラガイとカズラガイの他にも、殻口に刻みを持つカコボラとヤツシロガイの殻口部加工品が出土しており(市原市教育委員会 2007)、刻みを持つ貝を利用していたことがわかる。東北町東道ノ上(3)遺跡では、タカラガイ加工品とともにカズラガイ加工品が出土している。一王寺遺跡での発見と合わせて、刻みを持つ貝の利用が青森県太平洋沿岸地域に及んでいたことがうかがえる。

素材となるカズラガイは、房総半島以南に生息する貝であるため(奥谷 2000)、素材または加工品が搬入された可能性がある。しかし、貝の打ち上げ地は、貝の本来の生息地よりも遠方まで及ぶことがあり、筆者は三沢市の海岸でカズラガイの打ち上げを確認している。東道ノ上(3)遺跡や一王寺遺跡の人びとは、集落近くの海岸でカズラガイを採集できたことも考えられる。



図8 カズラガイ加工品



図9 現生カズラガイ

6. まとめ

今回 SX1 埋土から検出された貝類について、その組成を明らかにすることができた。また、1929（昭和 4）年の調査で出土した貝類と多くの貝種が一致することが分かった。SX1 埋土は、近代遺物の混入も見られるが、大山史前学研究所による調査で埋め戻された土と考えて良いだろう。遺物がないため組成が不明だった一王寺遺跡の貝塚について、貝類のみではあるが組成を明らかにし、過去の調査について検証できたことの意義は大きい。今後は、ほかの動物遺存体についても整理する必要がある。

貝製品については、貝輪とカズラガイ加工品の 2 点を紹介した。八戸は貝製品の出土が少ない地域であるため、本資料は八戸地域の縄文人の貝利用について、製作方法や素材の獲得など様々な点から知ることができる貴重な資料である。貝輪の製作方法について、観察と実験を通して考察を行った。今回の実験はかなり簡易的なものであるため、打撃方法については実験を重ねる必要があると考えている。八戸周辺での打ち上げ貝調査は、素材貝への理解を深めるため、今後も継続していきたい。気候や地形などの違いもあるため、打ち上げ貝の状況を単純に縄文時代に当てはめることはできないが、現代の貝の生息地や打ち上げ貝の状況を知ることによって、縄文時代の海に少しでも迫ることができるのではないかと考えている。

引用・参考文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター 2006『東道ノ上 (3) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 424 青森県教育委員会
 阿部芳郎 2007「内陸地域における貝輪生産とその意味－貝輪づくりと縄文後期の地域社会－」
 『縄文時代における印旛沼周辺の基礎的研究』XIV pp.43-64
 市原市教育委員会 2007『西広貝塚Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査報告XVIII
 宇部則保・横山寛剛 2012『是川石器時代遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書 135 八戸市教育委員会
 忍澤成視 2000「縄文時代における貝製装身具の実際」『貝塚博物館紀要』27 pp.1-24
 忍澤成視 2011『貝の考古学』ものが語る歴史 22 同成社
 奥谷喬司編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
 辻誠一郎ほか 2018「八戸地域における縄文時代の環境変動と景観復原」『研究紀要』7 pp.1-14
 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 2025『貝へのあこがれ』令和 7 年度特別展図録
 福田友之 1995「北日本におけるベンケイガイ交易－津軽海峡を渡った貝輪－」『北海道考古学』31 pp.125-145
 宮坂光次 1930「青森県是川村一王寺史前時代遺跡発掘調査報告」『史前学雑誌』2-6 pp.337-356
 横山寛剛 2017『一王寺 (1) 遺跡 史跡内容確認調査概要報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告 157 八戸市教育委員会
 横山寛剛 2018『史跡是川石器時代遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告 164 八戸市教育委員会

執筆者紹介

〈論文・資料紹介〉

「是川一王寺遺跡における骨角器の製作と利用

—泉山コレクションの骨角器を中心に—

The Production and Use of Bone Artifacts at the Korekawa Ichioji Site:
Focusing on Bone Tools in the Izumiyama Collection”

算用子 眞充 (北海道教育庁 生涯学習推進局 文化財・博物館課
文化財調査係 文化財保護主事)

上條 信彦 (弘前大学人文社会科学部 教授)

「一王寺遺跡の貝類と貝製品」

The shellfish and the shell artifacts from Ichioji Site

澁谷 侑奈 (八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 主事兼学芸員)

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

研究紀要

第 15 号

発行日 : 2026 年 3 月 27 日

編集・発行: 八戸市教育委員会

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

〒 031-0023 青森県八戸市大字是川字横山 1

TEL 0178 (38) 9511

印刷 : みちのく印刷有限会社

〒 031-0814 青森県八戸市大字妙字花生 8-107

TEL 0178 (31) 2175



八戸市埋蔵文化財センター
是川縄文館